
機械魔術の禊人

松村ミサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械魔術の禊人

【Nコード】

N3643X

【作者名】

松村ミサト

【あらすじ】

一千年前、世界は神に見限られたことにより文明を奪われた。

そのとき、人々は残っていた文明を掛け合わせ、『機械魔術』を生み出し、神——『悟神族』の力の大半を封印することに成功する。

それから一千年後——戦いの影響で原初の姿に戻ってしまった世界で、力を取り戻さんとする『悟神族』と、人類の戦士『禊人』との戦いが続いていた。

プロローグ この世界の歴史——世界はこうして滅んだ——

今からちょうど一千年前————

この世界は滅びた。

この世界に住まう人々は、神に見限られた。

かつて共存し、ともに世界を繁栄させてきた神が、まるでカードを裏返したように簡単に、あっさりと人々を見限った。

神は自分達を『じしんぞく悟神族』と名乗り、自分以外の存在、『ヒュマニウス人間族』ダイモニウス『ダイモニウス魔族』を見限り、彼らからあるものを奪った。

それは『文明』。

生きとし生けるものの全てが、莫大な時と労力————そして生命を懸けて積み上げてきたものを、悟神族は何のためらいも無く奪った。

その行為を口火に、彼らの配下であったはずの『エンジェリウス天使族』の大半が反旗を翻して地上の者達に味方し、後に『しんめつたいせん神滅大戦』と呼ばれる戦争の引き金となった。

この時、すでに人間族ヒュマニウスと魔族ダイモニウスは自分達の主力となる文明、『科学文明』と『魔術文明』の半分を奪われてしまっていた。

そこで、反旗を翻した天使族は自らの力を使い、人間族の『科学文明』、そして魔族の『ダイモニウス魔術文明』の残ったものを結合させ、新たな力を作り出した。

それが――――『デジタ・マギカ機械魔術』

決して相容れぬはずだった科学と魔術の融合。

その新たな力を持つて、今度は人々が神を見限り、長い戦いの末、彼らの力の大半を封印することに成功した。

しかしその代償と言わんばかりに、文明を奪われたことと相成り、地上は緑が生い茂る原初の姿へと変わり果て、人類も全種族合わせでもかつての人間族全人口の三分の一程度にしか満たなかった。

また、悟神族も滅んだわけではなく、人々の精神エネルギー、『ソル・エナジー』を奪い失われた力を取り戻すために人々を襲い始めた。

かくして人々は、この圧倒的ハンデを抱えたまま神の力を借りずに、また新に文明を築き上げ復興の道を辿ることとなった。

そんな風に一度世界が終わってから、千年後――――再世暦1000年。さいせいれき

人々は緑を切り開き、僅かな人口ながら国を作り、安息の地を求めて彷徨いながら、時折現れる悟神族と戦い続けている。

そして、そんな悟神族と戦う戦士を、人はこう呼んだ。

みんがじん禊人――――、と。

第一話 この世界の歴史―いまはこんなですが、みんな元気です―

明るい。

少女が毎朝眠りから目を覚ましたときに思う最初の感想はそれだ。

『もう朝なのか』みたいな睡眠に対しての執着とか、夢の内容がどうだったとか、少女はそんなことは思わない。ただ目を開けて、今まで真っ暗だった視界に光が差し込むことに素直な感想を抱くというライフスタイルを十六年間続けている。

少女が寝ている場所は、どこかの森の中だ。

壁も屋根も無い。ただ周りに生い茂った木々があり、ちょうど彼女の真上はぽっかりと穴が開いたように開けて、上がり始めた太陽の光が降り注がれていた。

少女は上体だけを起こし伸びをする。背骨と肩の骨がコキコキと快活な音を鳴らすその感覚がたまらなく気持ちいい。

そして勢いよく立ち上がると、そのまま走り出す。

前方の木々の隙間を縫うように走っていくと、すぐに開けた空間に出た。

そこは切り立った崖。その眼下には、小さく見えるコンクリートの固まり、街が見える。別に街自体は今の時代にとっては都市レベルの大きさだが、その周りに群生する自然の規模があまりにも大きすぎて小さく見えるのだ。

少女の目線からは、緑色の中に一滴の灰色を垂らしたようにその町が見える。

少女はその街をしばらく眺め、そして、小さく口元に笑みを作った。

そして少女はその街に向け、切り立つ崖から飛び降りていった。

キンコンカーンコン————

例に漏れずつまらない音のチャイムが鳴り響き、生徒達は雑談の続きをしながら席に着く。

「はい、私語は慎みなさい。出席取るから黙れジャリ共」

いつの間にか教壇に立っていた後半口の悪い教師に生徒達は特に驚きもせず、言われたとおりに口をつぐむ。

「飯仲尾」
いなかお

「はい」

出席は続けられていき、最後の一人を確認した後、教師は出席簿をパタンと閉じた。

「さあ、みんな。今日もいい天気ね」

どこにでもある普通の学校風景。

「というわけで、今日は皆さんに殺し合いをやってもらいます」

————ではなかった。

生徒はその言葉に特に驚きもしない。ただ冷ややかな空気を教師に対して発している。

「喜吉先生。いい加減実習日の朝っぱらからバトロワ宣言をするのはやめてください。『今日は』じゃなくて『今日も』ですよ。いい加減気が滅入ります」

そのうちの一人が拳手の後立ち上がって言った。しかし教師・喜吉世子は意に介さず、

「なーに言ってるの。この時代、学校でクソつまらない授業受けるよりもいかにして相手をぶっ殺せるかという技術を磨く方がよっぽど実用的なのよ。これはそのため気持ちを奮起させる言葉なの。分かる？ 棗」
なつめ

「全然分かりませんが、これ以上聞いても無駄そうなので着席します」

棗は無表情に淡々と語り、再び着席した。すると彼の隣の席のちよんまげのように後ろ髪を結った男子、蝶薙ちようなげアクエリアスが誰に言うでもなくポツリと、

「どうせまた男に振られたからだろ」と言った。

一瞬、時間が止まったような錯覚を教室にいる全員が味わった。

ドカーンッ！！

そして、喜世子が教壇に盛大に頭を打ちつけた音で、その呪縛は解かれる。

「そーなんだよ、振られたんだよ・・・人生で99回目の失恋だよ・・・なんなんだよこれ・・・あたしゃ漫画のキャラかよ、笑えねえんだよ・・・」

何やら怨嗟の声をブツブツと漏らしている。

「ねえ！！　あたしのなにが悪いの！！」

いきなり頭がグリンッ！と生徒達の方に向く。若干ホラーなその光景に、さすがの生徒達も少し引いた。

今日のHホームLの内容は、先生の男に振られる原因となる悪い点は何かをみんなで考えるわよ！」

HホームLの私的利用を高らかに宣言し、喜世子はやっと上体を教壇から起こす。

「はい、後ろの席から！」

「酒癖が悪い」

「がさつ」

「生活力が無い」

「胸が小さい」

後ろの席の丁度真ん中の男子生徒、日向糸柙ひゅうが いとねがそう言った瞬間、座っていた彼の腰にガッチリと腕が回される。そのまま一八〇度回転して後ろ側を向かされた。

糸柙が何かを言い終わる前に彼の身体が高速でブレ、そのまま教室の黒板に向かって放り投げられた。

ドゴンッ！！

轟音が教室を超え、廊下にまで響き渡る。糸柙はそのまま地面に落下する。

彼が起き上がろうと身体を起こすと、その腰にまたガッチリと腕を回される。

「誰が————」

彼を黒板へと投げ飛ばした喜世子が、ニッコリと微笑んだまま熊でも逃げ出すようなドスの利いた声でそう言った。

「貧乳じゃガキヤコラー——！！」

そしてそのまま糸柙を後ろに向かって投げる。今度はホールドを外さず、喜世子の身体と共に綺麗なブリッジを描き、彼の頭は今度は教壇に叩きつけられた。

バリバリバリッ！ ドゴンッ！

喜世子が放った華麗なジャーマン・スープレックスで、教壇が真つ二つに割れ、脚をだらしなく開いた糸柙がぐったりとしていた。

「そして————」

まるでビデオの逆再生のように今までの軌跡を逆走した喜世子と糸柙。喜世子はもう力の入らない糸柙に何のためらいも無く再びジャーマンをかける。

「ドーンッ！！」

ドーンッ！！

一発目と同じ投げっ放しのジャーマンにより、糸祢の身体は教室の後ろの壁に高速で叩きつけられた。そのまま地面にドタンッと倒れると、ピクリとも動かなくなった。

そんな彼を、教室の生徒全員は敬礼をしながら見送ってやった。頭部で華麗なブリッジを描いていた喜世子は体勢を元に戻し、生徒達の方に向き直る。

「ふうー。先生スツキリ！」

ピッカピカの笑顔でそう言った。そのことに、生徒全員がツツコまなかった。

「さて、冗談はさておき————」

生徒に対して三連続ジャーマン・スープレックスを決めたことを『冗談』と流すが、もちろん生徒は全員ツツコまない。

「今日は一時間目から四時間目までは体育の『戦育』せんいくよ。鉄鋼機構スチール・フレームを起動した後校庭に集合。いいわね」

そこで初めて、生徒達から『ええ〜〜！』というツツコミが入った。

「うっさーい！ 黙れクソジャリ共！」

教壇が無いため自分の後ろにある黒板をバンッ！ と叩いて生徒達を黙らせる喜世子。

「学園の方針に文句言うな！ 分かったらさっさと校庭に行く！ 行かなきゃ一人ずつジャーマンで窓から送り出すわよ！」

言われて、生徒達は文句を垂らしながら教室を出て行く。動かない糸祢はクラスで一番小柄でクラスで一番の怪力を誇るアンナ||リ―ベンスの肩に担がれ運ばれていった。

しかし教室には一人だけ生徒が残っていた。

豪快に机に突っ伏しながら、グーグーといびきを立てている。顔の下にある机にはよだれで水溜りが出来ていた。さらに手にはエロ

本を持っているなど、もうやりたい放題だ。

喜世子はこめかみに血管を浮かび上がらせ、学校一の問題児の机の前にまで歩いていく。

そして、腹の底まで大きく息を吸うと、それを声にして盛大に吐き出した。

「起きなさい！ 神風かなざき しんら森羅！！」

呼ばれた男子生徒、シンラはビクリッ！と身体を震わせ、ゆっくりと顔を上げた。

「……………ん？」

その顔は余すところ無くよだれで汚れており、机との間に糸を引いている。

そしてその汚れきった顔で、森羅はニツコリと笑顔を作った。

「グッモーニン！ 喜世子センセッ！ あれあれ、何だかご機嫌斜めな顔だな。そうだ！ そういう時はパンツ見せてください！」

寝起き早々ウザいくらいにテンションが高い森羅の態度に、喜世子のこめかみに血管が一つプラスされた。

「君ね…………まず言わせてもらおうと学校は居眠りをするところじゃないし私のご機嫌が斜めなのは君のその態度を見たからだしパンツを見せる気は無いし話の脈絡が無さ過ぎる。森羅、アンタいったい私の話どこまで聞いてた。もうみんな実習で校庭に————」

「先生…………」

急に森羅が深刻な顔になったので、喜世子は口を閉じる。

そんな彼女に、森羅は持っていたエロ本をバツ！と広げて見せて、

「これ！ よだれで写真濡っれ濡れでめっちゃくちやエロくね!？」

パリーンッ！

校庭で雑談をしたりウォームアップをしている生徒達の目に飛び込んできたのは、三階の自分達の教室の窓を割り、おそらくジャーマン・スープレックスで投げ出されたのであろう森羅の姿だった。

少女は走る。

生い茂る木々を避け、その速さをまるで変えず、ただひたすらに、街に向かって一直進に。

走る。

その顔に笑みを刻み、ただ走った。

「はい。全員集まったわね」

手をパンパンと叩きながら、喜世子は校庭に集まった全員の顔を見回す。

校庭と言っても、それはただの森の中だ。学園は一応国際機関であるため、土地を大量に保有しており、これもそのうちの一つ。一般的な運動ではなく戦闘訓練を行うための実習場だ。

彼女は自分の専用武装『ディバ^{デバイス}イブ・コンダクター』を背負い直し、空中に電子画面を投影させる。

「今日の授業はこれ。単独での戦闘実習。ルールは簡単。ただお互いの本気を出して潰しあうだけ。全員ぶっ倒すまで四時間ぶっ通しです」

その言葉に再び生徒が『ええ〜』と声を上げる。

「なに、不服？ そうねえ・・・じゃあ、こうしましょう。今日は特別に先生が相手してあげる。ここでルール変更。先生をぶっ倒すか自分以外の全員をぶっ倒したら今日の授業は終わり。五時間目と

六時間目も校長脅して無しにしてやるわ!」

その言葉に生徒達は『おお〜!』と歓喜の声を上げた。

「ただし!」

と、その声に喜世子が割り込む。

「四時間経っても決着が付かなかった場合は、午後の授業で全員の名前を恋人っぽいアダ名で呼びます」

嗚咽を漏らすものもいるほどのその恐怖の罰ゲーム宣言に生徒達から大ブーイングが上がる。しかし喜世子はそれらを華麗に無視した。

「それじゃ、各自鉄鋼機構^{スチール・フレーム}は展開したわね。リョーヘイ。マキ。あんた達は本気出したらダメだからね。はい、これ。模擬戦用の制御チップ」

そう言って喜世子は一八〇センチの大男、神楽^{かぐら}リョーヘイと、地面に付くほどの長い黒髪の少女、マキ^{マキ}にシュナイテッドにチップを渡した。

「分あってますよ、センセツ。カードも五枚までですよ」

リョーヘイは自分が背負っていた超長距離砲撃武装^{デバイス}『メントモリ』にチップを挿入する。マキも無言のまま、自分の近接戦闘刀剣武装^{デバイス}『ミカギリ』にチップを挿入する。

それを確認してから、喜世子は首を押さえてあくびしている森羅に向かって、

「森羅、あんたも加減しなさいよ。最大でも『橙』までだからね」

「分かってるよ先生。分かったからパンツ下さい」

「もう一発ジャーマン喰らう?」

「ブラを貰えるなら喜んで!」

「畜生っ! 逃げ場が無い!」

森羅への説教は無駄なので諦め、喜世子は生徒達に向き直る。

「じゃ、分かっているとと思うけど一応言っとくね。鉄鋼機構^{スチール・フレーム}は確かに強力だけど、人体の急所に合わせた部分は非常に防御は薄くなってるわ。だからそこを狙ったら比較的早く相手をぶっ倒せるわ。狙う

べきは頭部、心臓、肝臓、股間^{タマ}。相手の命取る急所はこの四つね。あつ、でも女はタマ無いからな。そもそもタマって潰されてもタマが直接取れることはないし、タマを取るための部分にタマは入らないのかな？ でも一応急所だしタマもタマ取るための部分に入れないたほうがいいのかな」

「先生。後半からタマがどちらを指しているのかまるで分かりません」

「あー、もう考えるの面倒くさい！ さっさと散開！ 一分後に開始よ！」

喜世子がヒステリック気味に叫んだため、全員が蜘蛛の子を散らすように森の中へと消えていった。

「さて……。どうすつかね」

実習が開始されてから三分。リョーヘイは森の中を当ても無くぶらぶらと散策していた。

ただ今彼がいる場所は『森エリアC-9』。スタート位置である『森エリアE-1』から六百メートルほど離れた地点だ。

授業終了条件が教師の喜世子一人倒すこととクラスのメンバーを倒すこと。普通に考えれば前者だが、それはかなり難しい。学園の教師の強さはまさしく人外レベルだ。下手をすればクラス全員を相手にする以上の労力を費やしても勝てるかどうかは怪しい。

だから彼は今、そのどちらとも言えない条件同志を天秤にかけていたところだった。

そこに、

「リョーヘイ……リョーヘイ……」

小声で誰かが自分の名前を呼んでいることに気付く。リョーヘイは警戒し、背負っていたメメントモリを構えた。

「待て待て。俺だ、俺」

「！ 森羅」

そこにいたのはいつものヘラヘラした笑いを浮かべた森羅と、
「クラスのみんな・・・？」

その森羅の後ろには、他のクラスメイト十三名が大挙していた。
「どうしたんだぞろぞろと・・・」

リョーヘイはメメントモリを下ろし、森羅のほうに歩み寄っている。

「いや何。手っ取り早く授業終わらせちゃおうと思ってね。早く帰って通販で買った同人誌読み漁って悶えまくりたいからさ」

「何か策があるのか・・・」

「簡単だっつもの。人海戦術で攻め込めばいいわけだよ。いくら喜世子センセが強くても、俺ら十五人丸ごと相手にすんのなんか不可能にも程があるって。そっちの方がよっぽど賢明だと思わね？」

すらすらと、ヘラヘラ顔を崩さないまま真剣な話をする森羅。

その話のリョーヘイはふむ・・・と考え込む。しかしそれもすぐのことで、物の数秒立たないうちに、

「分かった。その話のった」

「だろー？ そうこなくっちゃ！」

森羅はリョーヘイの肩をポンポンと叩き、そして他のメンバーに向き直った。

「ということで、クラス全員の協力は求められたわけだ。まあ、作戦なんて言ったけど、ぶっちゃけ詳しいこととか考えてないんで。ただ各々が全力で喜世子先生のおっぱいと下着を狙って突っ込んでいくっていう至極ストレートな作戦だ」

「本当に欲望にストレートな奴だなお前は」

「いやあ、実に青春だねえって感じだよ」

「教師の下着と身体が目的の青春なんて御免こうむるね。まあ後半はともかく、各々全力でつのは気に入った。そういうやり方は嫌いじゃねえ。いくぜ、みんな」

リョーヘイの言葉に『おお！』と全員が返事を返し、前進して

いく。

号令をかけたリョーヘイを先頭に進んでいったため、森羅は最後尾に付いていく。

森羅はヘラヘラしたまま、両手の拳を胸の前で合わせた。

その手には奇妙な文字が描かれた手甲と、同じく奇妙な文字が描かれた包帯が手首から肘までを覆っている。

森羅は胸の前に合わせた拳を上下に強く擦り合わせると、手甲の部分がカッカッ！と快活な音を響かせる。

それを合図にしたように、彼の手甲と包帯の文字が赤い光を発する。

次の瞬間にはそれは光ではなく、燃え盛る赤い炎へと変貌していた。

ヘラヘラ顔をニヤーと歪めると、森羅は大きく炎を纏った拳を振り上げ、

「赤炎^{せきえん}！！」

ドゴンッ！！

自分の前方のクラスメイト達のいる地面に向かって思い切り叩きつけた。

何のためらいも無く。

轟音が鳴り響き、爆煙が視界を覆う。

しばらくは微動だにしていなかったが、微かに聞こえるキィィイン・・・という高い音と同時に、森羅の前方の煙を吹き飛ばし、白い閃光が飛来してきた。

彼はその光を炎を纏った拳で思い切り横合いから殴りつけると、光は方向を変え、森羅の隣を通り過ぎて彼の遥か後方に着弾する。

その衝撃で、あたり一面を覆っていた煙が晴れる。

辺りは森羅を中心に半径二十メートルの木々は台風の直撃を喰らったように薙ぎ倒され、発生源である森羅も周りのものは焼け焦げていた。

そしてその薙ぎ倒された木々の中に、彼に向かって白い閃光を放ったリョーヘイが立っていた。その手にはメメントモリが砲撃モードで展開されている。その砲身から、白い煙がゆらゆらと上がっていた。

そしてそのリョーヘイを中心に、クラスメイト十三人が立ち塞がるようにして立っていた。その手には全員、武装を展開している。

「あっちゃー。いい作戦だと思ったのになぁー」

森羅は頭をかきながら残念そうに呟く。

「バーカ。お前の考えてることなんかすぐに分かったよ」

リョーヘイは明るくそう言うが、目は少しも笑っていない、完全に戦闘にスイッチが切り替わってしまったている。

「まずお前が先生相手と戦って勝つなんていう面倒くさいことするわけねえし、人海戦術なんて泥臭くて面倒くさいことをするわけがねえ。だったら俺たちを集めて一網打尽にする。この作戦が一番面倒くさくねえ。だからお前はこうすると思ったよ」

「あらら。ずいぶんひねくれ者だと思われてんのね、俺」

「安心しろ。ある意味では信賴してるんだ。嫌われ者って訳じゃない」

ニツ、と唇を歪める森羅に倣って、リョーヘイも唇を歪める。

そして、

「逃げろー！ー！ー！！」

リョーヘイのその一言で、クラスの全員が一目散に逃げ出した。

「あ、おい！ 行っちゃうのかよ！？」

すでに構えを解いて全神経を走ることに使っているリョーヘイに

向かって声をかける。

「当たり前だ。お前とやりあうんじゃ、俺たちはハンデがでかすぎる！ 協力できないんなら戦わず逃げるだけだ！」

そう言うのと、もうリョーヘイどころかクラスの全員の姿は見えなくなっていた。

『心配すんな。俺たちだけでも何とかやってやるよー！』

という声が最後に聞こえた後、全ての気配が消え、そこには森羅だけがポツンと立っているだけだった。

「・・・あーあ」

森羅は両手に付けた魔道具『コウテン』をカチカチと鳴らして、その場にへたり込むようにしゃがんだ。

「なんだよ・・・俺だけハブかよ・・・」

一人でブチブチと文句を垂れていた森羅はしばらく地面におっぱいの絵を描いていたが、それを一〇八個——所要時間七十秒——描いたところで、スクツと立ち上がり、

「よーし！ 先生も含めて、今日はクラスの女子全員の下着を取ろう！」

一人馬鹿な宣言をした後、みんなを追って走り出した。

「良かった？ あれで」

森羅を振り切った後、マキはたまたま逃げた『森エリアA-3』で合流したりリョーヘイに質問した。

彼女の一般会話は、大抵このおかしな倒置法で行われる。

「ん？ ああ。あいつはああ見えて寂しがりやだからな。ハブにしたらと思わせられりゃ、自分から仲間になりに来るさ。さすがに先生相手に俺たちだけじゃ戦力的に足りなさ過ぎる」

「してくれなかったら？ 協力」

「そんなときや———まっ、俺たちが何とかすりゃいいさ」
「リョーヘイ。そうだね」

「返さない！ この卑怯者！」

「なんとも言え！ 俺にはやり遂げなければならないことがあるんだ！」

『森エリアH-2』に、十百千羽撃ともせ はばたきと森羅の声が響いた。

「羽撃。最後通牒だ。これを台無しにされたくなけりゃ、おとなしく今つけている下着を差し出せ。おっと！ 時間をかけちゃダメだぜ。脱ぎたてホヤホヤじゃなけりゃな」

「そんなの嫌に決まってるでしょうが！」

羽撃は着ている巫女装束の長い袖とともに腕をぶんぶん振って、拒絶の意思を必死に表している。

「大体、なんで下着なんか取るのよ。あんたの変態に付き合ってるほど暇じゃないの。いまエル君から連絡入って、先生のところに行かなきゃいけないのに」

「俺の行動が変態だと！？ 馬鹿を言うな！ 俺の行動は生物の雄にとっては至極当然のこと！ 女子のパンツを被るのは雄として生まれたからには必ず通らなきゃならない道なんだよ！ それを否定する貴様こそ変態だ！」

「なんでよ！」

「変態とは人とは違う性的趣向を持っていることだ。だったら男としてのこの性への探究心が理解できん貴様は変態———まてよ。男にしか理解できないなら、つまりは男から見れば女は全員変態・・！？ だとしたら女から見た男もまた変態・・！？ やった

！！！ みんな変態だ——！！ 世の中変態だ——！！ 変態の楽園だ——！！」

「ダメだっ！　完全に頭に蛆^{うじ}が沸いてる状態だわ！　エル君！？」

羽撃は空中に電子画面を展開し、この戦闘で参謀を買って出たエル君こと、エルⅡエルに連絡を入れた。

『どうしたの、羽撃？』

「大変よ！　いま森羅と接触したんだけど、あいつハブにされたときのショックで変なスイッチが入っちゃってるみたい！」

『変なスイッチ？』

「女子の全員の下着を取って被ったあと、それで自分の服を作ってパリコレに出すって！」

『何をどうすれば仲間外れにただけでそんな考えに辿り着くの！』

？　テンションの具合はどう？　出来るならその考えを正させて作戦に加わってもらわないと———』

「無理よ！」

『どうして？　まさか、もう手出しできないほどのテンションに・・・！？』

「違うわ！　私の四つある早弁のうち、一番大好きな幕の内弁当を人質に取られてるの！！！」

『自分で何とかして』

急に冷たくなったエルに、羽撃は慌てて、

「ま、待って！！　わたしいったいどうすれば・・・」

『弁当と下着、どっち取られたい？』

「そんなもの天秤にかけられるわけ無いでしょ！！！」

『健闘を祈る』

ブツッ！！　と。そこで通信は乱暴に切られた。

「待って！　待ってエル君！　この変態と片時でも二人きりだと思わせないで！」

何度か通信を試みるが、エルの方は完全に着信拒否状態^{チャッキョ}だった。

「さあ、どうする羽撃！　このままじゃ、この幕の内弁当の塩鮭が大変なことになるぜ」

羽撃はおろおろしながら電子画面と森羅を交互に見て、やがて、決心したように。

「わ・・・分かった・・・下、だけで・・・いい・・・？」

いやに艶なまめかしく訊いてくる羽撃に森羅は首が取れそうなほど大きく首を縦に振った。

そして、羽撃は自分の巫女装束のいやに短いミニスカートの中に手をいれ、そこからスルスルと布を下ろしていく。

「っ——————！！！」

森羅は歓喜のあまり声にならない歓声を上げる。

「こ・・・これでいいでしょ・・・」

恥ずかしそうに、羽撃は手に持った縞模様の丸めた布を見せ付ける。

「早く、早弁その子を返して。ここに置いておくから・・・」

羽撃は地面に丸めた布切れを置くと、一步、そこから下がった。

そして、森羅は何かを悟ったような清々しい顔になっていた。

「ありがとう、羽撃。本当に—————ありがとう」

森羅はその場に屈みこみ、手に持っていた弁当の包みを地面において滑らせ、羽撃の元に送ってやった。羽撃はそれを拾い上げ、

「ありがとう、森羅」

それだけ言うと、一八〇度反転して一目散にどこかへ行ってしまう。

「—————さて」

屈んだ状態だった森羅は、そのまま犬のように四足でダッシュする。目的はもちろん、目の前にある布切れだ。

わくわくした顔でそれを摘み上げた森羅は、それを広げてみる。

赤と白という、ちょうど羽撃が着ていた巫女装束と同じ配色の縞模様のある—————

四角い、ただ四角いだけの布—————

「え・・・・・・・・？」

だれがどう見ても、それはただのハンカチだった。

そう。擦りかえられていたのだ。

あの脱ぐ動作のときからすでに、羽撃は手の内に握りこんでいたこのハンカチをうまく脱いだように見せかけ、それを丸めて森羅に渡してきたのだった。

「・・・・・・・・！！」

鬼の形相をして歯を食いしばる森羅の頬を、一筋の熱い雫が滑り落ちていく。

「つ――――！！」

そして、彼の心底どうでもいい雄叫びが、森の中に響き、消えていった。

第一話 この世界の歴史―いまはこんなですが、みんな元気です―（後書き）

どうも！

この作品から見始めた人は始めまして。『ANGEL』のほうから見てる人はお久しぶりです。

作者の松村ミサトです。

そんなこんなで自分の二作品目の小説です。基本は『ANGEL』のようにファンタジーですが、ここでは向こうでは少し影の薄めの機械や科学と言ったメカ的なものも出てきますので、皆様これからなにとぞよろしく願います。

こちらが初見の方も、『ANGEL』の方、よろしく願います。

『ANGEL』その天使、凶暴につき、
『http://ncode.syosetu.com/n6796g/』

意見や感想などがありましたらお気軽にしてください。

それでは、また次回。

第二話 自由こそが生き様な人たち

どこかから獣のような悲痛な叫び声が森にこだましている。

そんな中で、喜世子は背負っていた銃剣両用武装『デバイスディバイブ・コンダクター』を脇に抱えるようにし、木にもたれかかって静かに眠るように目を閉じていた。

その姿はまるで無防備で、まるでピクニックにでも来ているかのような穏やかな顔をしている。

しばらくすると、喜世子は薄く目を開ける。

「来たわね——」

そう言った直後、彼女の頭上から突如として雷が落ちてきた。

喜世子はそれを文字通り目にも留まらぬ速さで前方に移動し、直撃を避ける。落ちてきた雷は木の幹に直撃し、その部分から木を真っ二つにしてしまう。

喜世子はそれを見つめながらディバイブ・コンダクターを背負い直し、辺りを見回した。

「やっぱあたし狙いか。しかし一番槍をエル君が務めるとはね」

『外したっ！ 間髪いれずに二番槍、棗くんっ！！』

そんな声が数十メートル先から聞こえてきたとき、そちらに気を取られて声のした方に向いた喜世子の真逆から、弾丸のようなスピードで飛来してくる人影があった。

その人影、かげあき棗影明は自身の手甲型武装『デバイスクリスタル・ブレイク』を展開させ、すでに入力してある高速移動型身体強化術式『シユトルム過速』を起動し、さらに残像を消すほど加速をつけ、右拳を振り上げ、思い切り喜世子の後頭部目掛けて振り下ろす。

「もらった——！！」

こうしたら死にそうだな、などという配慮は無い。この程度で死

ないことを熟知した上で、棗は殺す気でさらに拳に力を込めた。

「なーにをもらったってー！ー！ー！」

しかし喜世子はデイバイブ・コンダクターを鞘から少しだけ抜き、その抜き身なった刃の部分で自身の後頭部に振り下ろされた拳を受け止めた。

「クソっ！！」

「その形の奇襲なら、あと十倍以上は速くなりなさい！！」

「物理的に不可能っぽいですが、善処します！！」

そう言った棗の顔面に喜世子の回し蹴りが入り、棗は数メートル近く吹っ飛ばされる。

「あらっ？」

軸にしていた左足首に違和感を感じた喜世子が下を見ると、彼女の足下にはいつの間にか水溜りが出来上がっている。

そしてその水溜りから水でできた手が伸び、彼女の足首を掴んでいた。

「あら、糸柁^{いとね}。大丈夫だった、頭？」

「そう思うんならジャーマンなんかかけんな！！」

そう激怒した水溜り、糸柁は、掴んだ喜世子の足を振り回し、何処へともなく投げつける。

喜世子は空中でクルクルと回りながら体勢を立て直し、投げられた方にあった木の幹を蹴って軽く飛び上がり、フワッ、と、軽く着地する。

するとその背後から、周りの木々を切り倒し、一本が二メートル以上もある巨大な大剣を二本持った蝶薙^{ちようなげ}アクエリアスが突っ込んできた。

「ふおおおおおおおお！！」

雄叫びと共に二本の大剣を振り下ろすが、喜世子はデイバイブ・コンダクターを背中から下ろし、鞘に収めたままそれを受け、その反動で後ろに飛ぶ。

「来たわね、チョンマゲ！」

「チョンマゲじゃない！ 蝶薙アクエリアスだ！！」

「そう言われたくなきゃ、その髪型やめるか、婿入りして苗字変えなさい！！」

吹き飛んでいく喜世子を追うアクエリアスの眼前に電子画面が展開され、その中に記載されていたアイコンを数個選択し、それらを展開する。

すると彼の背中の部分に、後光のように円を描く形で小ささまざまな刀剣が出現した。

「だああありゃああああアアアアアア！！」

小ささまざまな刀剣を、時には速さ重視で短いものに変え、またある時は威力重視で長大なものへと次々に切り替えながら、高速で喜世子と切り結ぶ。

しかし、喜世子は顔色一つ変えずにそれらをいなす。しかもデイベブ・コンダクターは一度も鞘から抜いてはいない。

「武器が多けりゃ勝てるって訳じゃないわよ。使えるのは二個までなんだから」

「常識に囚^{とら}われたら、その時点で負けるぞ！」

すると、背面に展開していた刀剣が一斉に喜世子の方に向かってその切っ先を向ける。

アクエリアスは展開していた電子画面に映っている『射出^{フルバースト}』を迷わず選択した。

「いけえええええええ！！」

ちょうど鏢迫り合いの状態に持ち込んだところで、喜世子目掛け一斉に刀剣が射出される。

「歯が溶けるほど甘いっ！！」

そう言った喜世子の眼前にも電子画面が現れている。彼女はそこに映し出されたいくつものウィンドウを一瞬で処理しきるとデイベブ・コンダクターをガン・モードに切り替える。そして自らが引く形で鏢迫り合いから抜け出し、銃口をアクエリアスに向け、引き金を引く。

射出された散弾型の光線は目の前にいたアクエリアスごと自分に向かってきていた武器を弾き飛ばした。

「ぐふおああ!!」

彼は後ろにゴロゴロと転がっていき、その跡を追うように弾かれた武器が落ちていく。そしてアクエリアスの鉄鋼機構スチール・フレームが防御エネルギー残量0を示し、彼は脱落となった。

「勇猛果敢は良いことだけど、ちょーっと考えが浅かったわね。ま、あんたに当たる分の弾はエネルギー調節しといたから大丈夫でしょ」
喜世子はガン・モードのデイバイブ・コンダクターをガシヤツ!とポンプアップする。そこから高エネルギー圧縮札『ライト・カード』が飛び出し、役目を果たしたことで空中で燃え尽きて消えていった。

「く……くそ……」

喜世子の読みどおり、アクエリアスは弾が当たった胸部を押さえ、立ち上がった。賞賛の声をかけようと喜世子が彼の方を見ると、その口元が薄く笑っていることに気付く。

反射的に、彼女は三メートルほど跳躍した。

そこに金属製の重たい拳が振り下ろされて地面を砕く。土が舞い上がり、地面にクレーターが出来上がった。

「やるじゃない糸称!」

喜世子は下にいる糸称を見る。

そこにいた糸称の身体はさっきの液体状とは打って変わり、体中が金属に変換され、ピカピカと光を反射して輝いていた。

「まだまだまだアー……!!」

糸称は下半身を液体に変換し、水流を地面に噴射して重たい金属製の上半身を空に打ち上げる。

その勢いを保ったまま、空中にいる喜世子に向かって拳を突き出す。

「あら」

喜世子はそれをデイバイブ・コンダクターで受け流す。その反動

で重心がずれ、彼女の身体は落下していく形になる。

糸柙の目がキラリと輝いた。

「これ待っていたー！！」

糸柙は身体を全て金属に変換し、空中で身動きが取れずにただ落下していくだけの喜世子目掛けてその重い身体で落下していく。

「ウリイイイイアアアッー！　ぶっつぶれよオオッー！！」

「そんなどこぞの吸血鬼みたいなセリフを吐くと――――大失敗犯すわよー！！」

喜世子はガン・モードのディバイブ・コンダクターを自分の真横に向け、バンッ！　と。何も無い空間に発砲した。それだけで彼女の身体は反作用の法則で発砲したのとは逆方向に飛んでいった。

「あらアッ！？」

糸柙は喜世子のすぐ隣を通り抜け、そのまま地面に派手に墜落する。第二のクレーターの中心で、人型にできた窪みの中に埋まってしまった。

そのすぐ脇に、喜世子はスタツ、と着地する。

「あんまりスマートな戦法じゃないわね。応用の利く技なんだから、もうちょつと攻撃バリエーションの可能性を見つけてみなさい」

クレーターの中心に向かって教師らしくアドバイスを出し、喜世子はそのまま背を向けて立ち去っていつてしまった。

アクエリアスは遠くからクレーターに向かって、

「大丈夫かアー！ー！」

と、声をかけてやった。すると窪みから上体だけを起こした糸柙が、

「くっそ……！　あの胸なしめ………」
と呟いた。

ガシャンッー！！

ポンプアップの音と同時に、彼の後頭部に硬い銃口が押し付けら

れた。

それと同時に、金属変換から元の身体に戻っていた糸柁の体中から冷たい脂汗が雑巾を絞ったみたいに流れ出した。
あぶらあせ

「どんな気分？ 糸柁……」

その問いかけに、糸柁はまるで時間が止まったかのように固まって答えられない。

そんな彼を無視して、喜世子は言葉を続ける。

「動けないのに背後から近づかれる気分ってのはたとえど……戦いに負けて見逃してもらった男が……負かされた相手の聴力も考えずに悪口を言っただけで多少なりとも自分の中の鬱憤^{うっぷん}を晴らそうとした瞬間！ グイイツ」

喜世子は銃口をより強く押し付ける。

「……と、動けない男の後頭部に銃口を押し付けられてる気分に似ているってのは……どうかな？」

「それ今の状況を普通に説明しただけ……」

やっと搾り出したかすれた声は、しかし喜世子の心を動かさない。彼女は小さく、

「そう……」

と、呟いて、ディバイブ・コンダクターを何回もポンプアップする。

ディバイブ・コンダクターは普通のショットガンと違い、ポンプアップするほどライト・カードからエネルギーを抽出して、威力や一度の射撃回数を増すことが出来るのだ。

ガシャッガシャッガシャッ！

徐々に近づいてくる地獄の重圧に耐えられず、糸柁は友人に助けを求める。

「助けてー！ー！ー！！ アクエリアスー！ー！ー！！」

「あっ、アクエリアスならさっき『脱落したから自分は何も関係ありません』ってすごい速さでどっか行ったわよ」

「チクシヨー！ー！ー！！」

ガシヤッガシヤッガシヤッガシヤッ!

そんな話を続けながらも、ポンプアップの手は一向に休まらない。

「私はね、これでもCはあるのよ」

そして喜世子がぐずり出した糸柙に向かって言葉をつむぐ。

「でもね、教室にいる生徒が私より大きいから私のが小さく見えるの。だからけして私が小さいわけではないの。分かる？」

「分かります！ 分かりましたから助けてください！！」

ギヤーギヤー喚く糸柙を見下ろしながら、喜世子はポンプアップの手をピタリと止めた。

「そう、分かったのね」

糸柙は何回も何回も肯定のために首を縦に振る。

「でも、もう遅い」

喜世子はニツコリと笑ったまま、引き金を引いた。

「ツ—————！ いやだアアアアアアア！！」

チュドーンッ！！

大地を揺るがすほどの大爆発が起きてから数秒経ち、煙が晴れたそこには、鉄鋼機構で相殺しきれなかった余剰エネルギーで黒焦げになっている糸柙と、それを見下ろす喜世子だった。

「糸柙。あんたの敗因はたったひとつ……たったひとつの単純な答えよ……」

そう言って喜世子は気絶した糸柙に背を向ける。

「『あんたは私を怒らせた』」

それだけ言っ、彼女は歩み去っていった。

「本当にあれでよかったのか？」

アクエリアスは逃走中に合流した棗とエル君に声をかける。

エル君は自分の目の前に四面ものコマンドスクリーンを展開し、四つのキーボードを休みなく打ち続けている。それを棗が肩車をして運びながら、アクエリアスと並走している形だった。

「仕方ないよ。あの状態になった喜世子先生には何を言っても無駄さ」

「でも、俺は鉄鋼機構スチール・フレームが解除されてて無理でも、棗なら止めに入れたんじゃない？」

「アクエリアス。お前は俺が全裸にオリーブオイル塗りたくってライオンの檻おりの中に入っていくような馬鹿に見えるのか？」

「ライオンがオリーブオイル漬けに喜んでくれるかどうかは知らないが、確かに状況的には似たような感じだな」

アクエリアスは納得しているが、しかしどこか腑に落ちないような微妙な表情をしている。

そんな彼を慰めようと思い、エル君は口を開く。

「まあ、死して屍拾うもの無し、って言うし」

「まだ死んでないぞ!？」

「あつ、そうか。まあ別にいいよ。どうせあの状況からの救助なんて死亡届出した後の電気ショックぐらい意味が無い」

「エル・・・相変わらず顔に似合わずえげつないな・・・」

「そんなことより、作戦を第二段階に移そう」

エル君は忙しそうなふりでキーを叩きながら、第二段階への準備を進めるのだった。

「さーって、と」

しばらく森を探索していた喜世子は、かれこれ三十分は誰も攻めてこないで、この間使シグ俱に入力したばかりの『世界の銘酒丸分

りブック』というアプリを見ながら暇を潰していた。

使俱はこの世界の人間が必ず持つ高純度情報圧縮型端末であり、これによって連絡を取り合ったり電子画面の展開、さらには戦闘用術式を使う者にとってはそれらを入力・発動までが可能になる。ちなみに喜世子の使俱は狛犬型で、名前を『あーちゃん』という。狛犬の阿形の方だからというのはいうまでも無い。

「あいつら、もしかして全員で潰しあう方に切り替えたのかな？」

イギリス原産の、一本が自分の給料三ヵ月分もするワインのページを眺めながら、ふと、寂しいような感じになる。

今日はこのようなルールになったが、実際なら教師は実習が終わるまでは特に何もせず、生徒達が戦闘を行っているエリアで監督を行わなければいけない。

他の教師なら本を読んだりして時間を潰すのだが、生憎ながら喜世子は大抵の本は読み飽きてしまっている。かといって寝たりすると、何の用も無いくせに気まぐれに『見学しに来た』などという校長と鉢合わせて小言を言われたりする。それを差し引いても、彼女のクラスには放っておくと授業を抜け出して女子更衣室に行こうとする森羅がいるので、寝たりしてその馬鹿が新聞に載るような事態を避けるため寝ることなど出来ないのだ、ぶっちゃけ戦育の授業中は喜世子にとっては拷問級に退屈なのだ。

だから今日は喜世子にとっては非常に楽しめる時間になるはずだったのだが、相手が攻めてきてくれなければ神経を使う分、こちらの方が退屈且つ疲れてしまうのだ。

「まあ、でも————」

喜世子はアプリ画面を閉じ、

「ウチの生徒はそう簡単に退屈にはさせてくれないわよね」

瞬間、喜世子は右に勢いよく飛んだ。

そして、それとほぼ同時に、さっきまで喜世子がいた場所を高速で何かが突っ切っていく。

それは数メートルほど先で大きくドリフトして、喜世子の方に向

き直る。

一枚の鋼鉄製の板、サーフボードのような形状をしたそれは、搭乗機型武装『パルス・ウェーブ』だ。

それに乗っているのは、その持ち主であるいかにもそこらにいるストリートボーイのようなファッションのノリエルⅡシーゲット。

それともう一人。一見すれば浅黒く見える濃い赤銅色の肌をして、額にはサイのように皮膚に包まれた二本の短い角が生えている、鬼^オ族の間切丸だ。

「あら、ノリエルとキリちゃん。今度の相手はあんた達？」

喜世子はデイベイブ・コンダクターの柄を掴み、臨戦態勢をとる。それを見ると、ノリエルと切丸は表情を硬くした。

「行くよ、切丸くん。しっかりね」

「まかしとけ、ノリエル」

それだけ言うと、切丸はボードの上から降り、ノリエルだけが喜世子目掛けて突っ込んでいく。

突っ込んでいく途中で、パルス・ウェーブは刃となっている両端の部分がガシャツと音を立てて開き、底から発生した青い光の粒子で刃がコーティングされた。それにより両端部の切れ味はさらに威力を増す。

喜世子は背中から武装^{デバイス}を下ろして構える。ノリエルはさらに速さを増して突っ込んでいく。

が、予想だにしないことが起きた。

いきなりノリエルが大きく喜世子の頭上をまたぐように進路を変えたのだ。

そして彼が上に移動したことにより、ノリエルの後ろにいた切丸の姿が見えるようになる。

切丸は自分の身長ほどはある金棒型の武装^{デバイス}を野球のバツターのよ

うに構え、そして、
「『衝々撃々崩々打』ッ！！」

思いつ切り、それを振り切った。喜世子はそれを見てとっさに自

分の前に武装を^{デバイス}防御体勢で構えた。

すると、ドンッ！！と。喜世子の身体が数メートルほど後ろに吹き飛ばされる。

切丸の金棒が通った軌道上から、とてつもない速度で複数の衝撃波が飛んで来たのだ。

さらに飛んでいる喜世子目掛け、上空に移動していたノリエルがボードからビームを発射してくる。喜世子はそれを全てディバイブ・コンダクターで弾き落としながら、地面にすべるように着地した。

彼女は自分の鉄鋼機構^{スチール・フレーム}の損傷度合いを見るが、対衝撃防御が完璧であったため、まだ防御エネルギーは無傷の状態だった。

「いやー、今のは危なかったな。先生ちょっとヒヤッてしたよ」

素直な感想だ。てっきりノリエルが波状攻撃でも仕掛け、それを援護として一撃必殺としての威力が高い切丸が攻撃を至近距離で当ててくると、二人に遭遇した瞬間に予測していた喜世子にとっては、まさしく最初からその考えを覆されたのだから。

「いやはや、成長したね二人とも。去年とは^{だんち}の戦術に、先生は嬉しいぞ」

「そりゃどうも！」

ノリエルはボードの端を左手で掴み、ひっくり返るほど後ろに体重をかけて旋回すると、再び喜世子目掛け突っ込んでいく。その途中、使^{シグ}俱にアクセスすると、その中から取って置きの式を選択し、起動する。

バッ！！と。いきなりボード両端に展開されていた青い粒子が矢印の先端のように巨大になる。ボードを掴んだままの体勢のノリエルがそのまま身体を捻ると、ボードはそのままコマのように高速回転し始める。

「一気に決めるよ！ これ十秒以上は耐えられないから」

「あら、時間制限付きの技？ その分強力なのかしら」

「違う！ 酔う！！」

弱点を堂々と告白しながら突っ込んでくるノリエルを警戒しながら

ら、喜世子は後ろにいる切丸にも注意を向ける。彼は相変わらず金棒をバットのように構え、遠距離からの攻撃に徹するようだ。

そして、ついにノリエルが喜世子を射程内部に捉える。

「『氷滑斬』！！」
アイス・ダスト

その名のとおりに、青い粒子が削られた氷の粒を連想させる幻想的な攻撃が前方から飛来し、

「『震々壁』！！」
しんしんへき

後方からは金棒を振るって発生した衝撃波が壁のように一面を制圧しながら向かってくる。

さてどうするかと喜世子はコンマ一秒以内で思考を回転させ、すぐに行動に移る。勢いよく地面を蹴ると、そのままノリエルのほうに向かって疾走していく。

そして鞘に収めたままのディバイブ・コンダクターを前方に構え、回転するノリエルの刃に接触させる。それと同時に、彼女は回転の流れに乗るようにそのまま左に向かって飛んだ。

バチィッ！ と火花を散らせながら、自らも加えた力の勢いで喜世子は吹っ飛んでいく。予想以上に威力が強く、身体がグルグルと回転して視界が定まらない。今日は予想外な事が多いと驚きながらも、生徒達の成長に少し嬉しく思う。

オエエエエエエ！ と、ノリエルのえずく声が聞こえてくるところを思うに、もうあの技自体は停止しているのだらう。あんなもの使うのならもうちょっと三半規管を鍛えろと後で説教してやらねばと思う。

徐々に視界が定まると、地面に鞘ごとディバイブ・コンダクターを突き刺し、無理矢理勢いを殺して停止する。

すぐに二人の方に目を向けると、

「ヒィィアッハアアアアア！！」

さっきまでえづきまくっていたノリエルは、先ほど切丸が発生させた衝撃波の壁の上を波乗りしていた。

「最高のビックウェーブだ！」

その声に満足するように、上機嫌になった切丸はどんどん同じように衝撃波を発生させ、波を強くしていく。

「コラー、授業中に遊んでんじゃない！ 遊ぶんなら先生も混ぜろー！」

デバイス
すぐに武装を背中に担ぎ直し、教師にあるまじき注意をする。

「止めたければこっちに来てくださいよ先生。でも、来たら多分負けますよ」

そのあからさまな挑発にカチンと来た喜世子は、ありや一発シメてやるか、と物騒なことを思いながら、拳を二、三度握ったり開いたりすると、遊んでいる生徒二人に向け、鉄拳制裁のために地面を蹴って走り出した。

「今だ！ イコル君、ゼンオー君、伸太君！！」

それを待っていたかのように、ノリエルが大声で叫ぶ。それを合図に、近くの木々の間や草むらから三つの影が、喜世子の前に立ち塞がるように出てきた。

出てきたのは、大柄で目つきは悪いが実は優しい竜人族のイコルドラゴニア、銀色の長い髪に八重歯と童顔が素敵な人狼族の双海ゼンオーウルフェル。そして色黒でラテン系の吸血鬼、飯仲尾伸太だ。ヴァンパイア
いいなおしんた

彼らは後ろにいる切丸も含め、クラスでは魔族男子四人組と呼ばれている。

「行くぞ！ 気を引き締めていけよ貴様ら！！」

「行くぞ行くぞ行くぞおー！ 行っちゃうぞー！」

「さあって、行くとしますかね」

イコル、ゼンオー、伸太はそれぞれが三方向から取り囲むように喜世子に向かっていく。

「「ウアガアアアアアア！！」」

その途中、イコルとゼンオーは自らの細胞を活性化させる。彼らの身体が発光し、その形が変わっていき、光が碎け散るように消え

去ったときには、イコルは堅牢な鱗の肌と巨大な翼を持つ竜の姿に。ゼンオーは銀の毛並みが美しい巨大な狼の姿に変身していた。

「切り捨て御免!!」

イコルの鋭利な爪を持つ巨大な腕が喜世子目掛け振り下ろされる。しかし、喜世子はそれを真っ向から拳で受け止めた。ぶつかり合った拳同士から腹の底に響くような重低音が響く。

「しまっ————ッ!!」
インヤルギル 唯技か!!

「鍛えが足りんわぁ————!!」

喜世子はそのままイコルの腕を掴むと、インヤルギルミステイ・タイラント 唯技・『神秘力豪』を使い、思い切り振り回す。

インヤルギルデジタ・マギカ 唯技とは機械魔術で言うところの奥義であり、その名の通りその者が持つ唯一無二の魔術式のことである。

喜世子が使用している『ミステイ・タイラント神秘力豪』は簡単に言えば身体能力の術式だが、同系列の能力、すなわち『筋力強化特化型』『速度強化特化型』『頑強性強化特化型』全ての特性を兼ね備えた珍しい術である。

イコルは竜巻よろしくぶんぶんと振り回され、喜世子に攻撃を加えようと突っ込んできていたゼンオーをそのまま弾き飛ばす役割を担ってしまっていた。

「ギャヒイインッ!!」

その姿通り犬みたいな鳴き声を上げ、ゼンオーは地面を転がる。

「おい、大丈夫か？」

「平気だい!!」

ゼンオーは起き上がり、かぶり頭を振って気合を入れなおす。

「おい、シンちゃん。今からでもスーパーマード使え! 今の状態じゃ先生に勝てないぞ!」

「い、嫌に決まってんだろ!!」

伸太は慌てて首を振る。

「男の血なんか使ってスーパァー・シンちゃんになるのなんて真っ平ごめんだっの!!」

「この際我慢しろ！ 見ろ。イコル君あのままだと空飛べそうなくらい回されてるぞ。あの女人間じゃないぞ。化物並に凶暴すぎるぞ」
「嫌なモンは嫌なんだよ！」

イコルが涙目になってハンマー投げのハンマーみたいに放り投げられたが、それでも伸太は首を縦に振らない。

ゼンオーは焦りながら、

「わ、分かったぞ。なら俺が女っぽい髪型になるから、それで頑張つて！ 何がいい！？ ポニーテール！？ それとも三つ編みおさげにするか！？ 俺的にはポニーテールの方がいいんだけど、この長さなら中華風のシニヨンにもできるぞ！ でもやっぱりお勧めはポニーテールで————」

「ポニーテール推しすぎだろ！ いくらお前が長髪で女っぽい童顔だからって言ってもな、例えばウンコをカレーだと思って食える奴はいねえだろ！！」

「お前にとって男^{俺ら}ってウンコと同列なのか！？」

伸太の発現に酷くショックを受けたゼンオーだったが、次の瞬間、再び喜世子に向かっていつて敢え無く左フックで返り討ちになったイコルに巻き込まれる形で吹っ飛んでいった。『キュッ——』という断末魔のような小さな声が、すぐ隣にいた伸太の耳に残った。

ダメージ過多でリタイアとなった二人は変身も解け、小柄なゼンオーの上に大柄なイコルがのしかかっているという最悪な形で地面にのびていた。

それに一瞬目を奪われていた伸太が慌てて視線を前方に戻すと、いつの間にか距離を詰めていた死神が笑顔で目の前に迫っていた。

「次はお前かぁ————！！」

「やっぱなつときやよかったぁ————！！」

後悔を言う口はこの口か！ と言わんばかりに放たれた喜世子の拳は真っ直ぐ伸太の顔面に突き刺さり、そのまま折り重なって山になっている失格者組の二人の所にふっ飛ばし、見事頂上にもう一つの屍^{しかばね}を築き上げた。

「ふうー。先生スツキリ！」

額の汗を爽やかに拭い、喜世子は邪悪な笑顔で残りの二人に向き直る。

ノリエルはその顔を見て本気で『あ、終わった・・・』と思ってしまう。

「ノリ！ もう大丈夫だ、行けるぞ！！」

しかし下から聞こえてきた切丸の声に何とか正気を取り戻す。ノリエルはすぐにパルス・ウェーブに蓄積されたエネルギー量を確認する。

今までアホのように切丸の発生させてきた衝撃波に乗り、全て受けきってきたのは、それをエネルギーとしてパルス・ウェーブの推進力と攻撃力を跳ね上げるこの荒技を使うためだ。実家の整備工場で改造し、容量を五倍以上にしたエネルギータンクはすでに満タンになっていた。

「ありがとう切丸君！ これで今日は半ドン決定だ！！」

ノリエルは画面に展開されたロックオンカーソルを慎重に合わせていく。しかしそれをさせまいと、喜世子は身体能力を強化したままこちらに向かって突っ込んできた。その速度は速く、おそらくもう数秒でこちらに接触できるだろう。

しかしノリエルは慌てない。ただ必死に意識を集中し、ロックできるタイミングを見定める。下から切丸が不安げな視線を送っているのが分かるが、それでも焦らない。むしろそれを糧により一層集中する。

そして距離が十メートルを切った時点で、カーソルが完全に喜世子を捕らえた。

「行っけええええええ！！」

ノリエルは推進力を最大値に上げ、パルス・ウェーブを射出した。轟ッ！！ と巨大な音を立てながら空気を切り裂き、コンマ一秒足

らずで喜世子の目と鼻の先程の距離に詰め寄る。両端部の刃は今は実体剣に戻してあるが、それは切丸から供給された振動をそのまま開放し、超々高周波振動ブレードへと変貌を遂げている。触れればいくら身体強化術式を展開しているとはいえダメージは必至だ。それはこのまま行けば喜世子の喉元に直撃するコースを進んでいる。

そしてその距離が数センチにまで迫った途端、喜世子はほんの少しだけ身体のを心ならずし、そのコースから外れようとする。

ノリエルは高機動下での反応支援術式でそれを確認すると、ボードを回転させ、回転力で威力を上げた一撃を叩き込もうと重心を低くした。

しかしそれがまずかった。重心を低くするときに必然的に低くなる頭部、顔面に、喜世子の突き出した拳が思い切り突き刺さった。

自らの速度も相成って高威力のカウンターを喰らう形になったノリエルの身体は喜世子の腕一本で遮られ、その衝撃でパルス・ウェーブはノリエルの脚を離れて制御を失い、木々を薙ぎ倒しながらどこへともなく飛んで行ってしまった。

「触れられないんだったら、触れられるところを叩くのみ。ダメよ、絶対的優位なときでも気を抜いちゃ」

そのアドバイスはすでに気を失い、防御エネルギーも切れて脱落したノリエルには届かない。喜世子は鼻血を出しているノリエルをそっと地面に寝かせてやる。こういうちょっとした優しさが、傍若無人な彼女が生徒達に慕われている理由でもある。

さて、と後ろを振り向いてみると、一目散に自分に背を向けて走る切丸が目映った。

喜世子の眼光がガラリと怪しい輝きを見せ、驚くほどの跳躍で十メートル以上距離が離れていた切丸の上に着地し、すぐにマウンツの体勢をとる。

パニックであうあうと言葉にならない声を上げていた切丸は、喜世子が顔面に放った一撃で、すぐに静かになって動かなくなった。

「やられたアー……！！」

スクウェア・エニックス

魔界男子四人組とノリエル組の戦闘を遠距離から観察していたエル君は頭をボリボリとかきむしりながら叫ぶ。

「おい、どうなってる。ノリエルの新技があれば何とかなるんじゃないのか、エル」

その光景をエル君の使俱シグから転送された画面で見ていたアクエリアスがあきれたように言った。

「途中までは良かったよ。でも甘く見すぎてた。まさかあそこで『ハード・コマンド 鋭加神経』と多重唯技できるなんて……。完全に僕の読み違いだ」

デューアルリンク
デジタル・マキガ 機械魔術で唯技を二つ以上同時に発動する技術を多重唯技と呼ぶ。

ノリエルの一撃が当たる一瞬、喜世子の反応なら避けることまでは可能であるとはエル君はふんでいた。だが計算違いだったのは、喜世子があスキルのタイミングで自身の持つもう一つの唯技、感覚神経を鋭敏化させ、反応速度を数段階上に上げる『ハード・コマンド 鋭加神経』をあスキルの土壇場で発動させたことだった。

ハード・コマンド 感覚を跳ね上げる鋭加神経と身体能力を向上させる神秘力豪。こ

ミステイ・タイラント
れほど相性のいい技同士は無い。なにせ鋭加神経で向上した反応に神秘力豪で強化された身体能力が加われば、一メートル以内の距離で撃たれた弾丸など簡単に叩き落とすことが出来るからだ。実際に酒に酔った喜世子が繁華街のチンピラともめてその荒技を使ったことがあるのを、クラスの人間なら誰でも知っている。

「つていうか、リョーヘイ君やマキちゃんには制御チップ渡しておきながら自分は一切加減してないよ！ さてはあの暴力女、初めから約束する気無かったな。くっそ……理事長に今までの非道の数々を暴露してやろうか」

エル君が今までの喜世子の暴挙の数々を脳内で箇条書きにして整理していると、近くの茂みがかさがさと揺れ、中からいつも何を考えているか分からない棗影明の仏頂面が顔を出した。

「いや、そうでもないぞ。喜吉^{きよし}先生が本気を出したら、開始三分で決着が付いている」

茂みからのそのそと体を出しながら棗がエル君をなだめる。彼はエル君に言われた次の作戦の仕込みが終わり、今帰ってきたところだった。

「分かってるよそんなことくらい。まったく、あのチート性能は本当に厄介だよ」

棗の方を見もせずに、エル君はイライラしながらキーボードを叩く。

「あと残ってるメンバーは森羅君を抜いて八人。せめて欠席してる四人がいれば戦況も変わったんだろうけどなあ。獅子^{ししお}緒さんがいればなあ」

「まあ、今残ってるのはほとんど女子だし、戦闘向きは羽撃とアンナしかない。エルも直接戦闘は無理だし、まともに戦えるのは六人。あの怪物教師を相手にするには心許^{こころゆ}ないな。あつ、そう言えば比較的無傷だから忘れてたけど俺脱落してたな」

木にもたれかかりながら、アクエリアスは思い出したように言う。思えばあの台風のような戦闘教師と一戦交えてこの程度だったことに、彼は少なからずホッとしていた。

「ってことは戦闘要員は実質五人か。一番いいことを言えば、森羅が何とかこちらの軍勢に加わってくればいいんだが————」

「俺がどうしたって？」

「だから森羅を仲間に引き込めれば——って、うわああ!？」

とっさにアクエリアスはその場から飛び退く。見ると彼が今まで寄りかかっていた木の枝に、森羅が逆さまになってぶら下がっていた。膝の裏で木に引っかかりながらいつものヘラヘラとした表情をしている。

「し、森羅!？」

「そうだよ、森羅だよ」

勢いをつけ、くるんと一回転して森羅は地面に着地する。それを

見て三人は後ろに数歩下がった。

「んだよ、どうした？ 何そんなに怖がってんだよ？」

「お前、一時間も経ってないのにもう俺らにしたこと忘れたのか・

・いいか、よく聞け森羅。俺はな——」

アクエリアスは言いながら、いつでも武器を展開できる体勢を取っていた。すでに脱落して入るものの『またまたあ、そんなこと言うのはお前らしくねえな』などといって攻撃されないと分らないからだ。

棗はすでにクリスタル・ブレイクを展開して戦闘態勢に入り、エル君も逃げるための準備をしている。

「って、おい！ 何お前だけ逃げようとしてる！ 立場的に俺だろ！」

「エル君！ ここに来てそれは無いと俺も思うぞ！」

「無理だよ！ 僕が真つ向勝負で森羅に勝てるわけ無いだろ！？」

だから二人の邪魔にならないようにここは撤退を——！」

「「させるか！」」

アクエリアスと棗は一斉にエル君に飛び掛り、押さえ込む。もともと小柄な上に戦闘向きではないエル君は、体格のいい二人に押しつぶされて簡単に無力化された。

「は、離せー！」

「誰が離すか！ いいから戦え！」

「死ぬときは一緒だ。エル君！」

男三人がギャースカと喚いているうちに、森羅は三人下に歩み寄っていく。

「おいおい。何勘違いしてんだ？ 俺がいつお前らと戦うなんて言っただよ」

「「「えっ？」」」

その言葉に、本気で嬉しそうな声を出す三人。

「ほ、本当に戦う気はないの？」

「ああ」

森羅は拳を胸の前で合わせて上下に擦る。そうすると、彼の拳にオレンジ色に発光し、それとまったく同じ色の炎が発生した。

「俺は単純に、みんなを無力化しに來ただけだから」

その声はまったくいつものトーンであったはずなのに、なぜか三人には地獄の底から自分達を呼ぶ亡者の声に聞こえた。

「っていうかいつの間にテンションがそこまで——！」

「馬っ鹿だなあ。二段階までなら女の子のパンチラ妄想しただけでもいけるんだって」

エル君の疑問にニコニコ顔で答えながら、森羅は腕を振り上げた。
「三人ならやっぱ、こんくらい威力ないとな」

「待て！ 俺は実はすでに脱落してて————！」

「くそお！！」

アクエリアスの言葉を遮るように、半ばやけくそで棗が拳を構え、森羅に向かって飛び掛っていった。

しかし森羅は別段驚きもせず、ただ一言、

「『とうえん橙炎』」

技名を言い、思いつきり突っ込んできた棗に拳を叩き込む。喰らった棗はオレンジ色の炎を纏ったままエル君の所に吹っ飛び、非難しようと走り出していた近くのアクエリアスも巻き添えに盛大に爆発した。

爆煙が晴れて現れたのは、黒焦げになり防御エネルギーが切れて動けなくなった三人だけだった。

「いやー、これで残ってんのは俺入れて六人か。ルーちゃんは多分戦わないから五人かな？」

森羅は額を拭い、からからと笑いながら他のメンバーを探しにどこかへと行ってしまった。その姿はまるで悪びれた様子も無く、むしろ清々しくさえもあった。

「あ……や、ろう……俺巻き添えじゃねえか……」

「虚しい……」

「くや……し……」

最後の力を振り絞って言葉を残した後、三人は揃って気絶した。

棗影明、エルⅡエル、リタイア脱落。

蝶薙アクエリアス、とぼっちり。

残り六人（欠席四名）。

少女は街に到達した。

基本的に街と森の境目である外周部には結界が張ってあるのだが、悟神族以外のものならば簡単に通ることが出来る。

しかしそこには同時に小さな門ゲートがあり、数台のカメラが侵入者に対して常に目を見張らせている。少女は今の形式となった国家に属していないためこの街、『関東』には正式な形での入場を行うことが出来ない。

仕方が無いので、少女は軽く能力ちからを使うことにした。

彼女が軽く地面を蹴ると、一瞬でその身体はゲートを突破し、街の中に入ることに成功した。おそらくカメラには何かが写ったというのがばれているだろうが、画像を解析してもばれない自信があったため、少女は何食わぬ顔でその場を離れる。

少女は人込みを縫うように進み、目的の場所を見つけた。少し古ぼけた感じのするその建物の中に、何のためらいも無く足を踏み入れる。

そこには、一人の女性が笑顔で立っていた。愛嬌の溢れた丸っこい顔。見ているだけで人を和ませるような不思議な魅力がそこにはある。

少女はその女性の目を真っ直ぐ見て、言った。

「コロッケ十個下さい！」

「あいよ！」

女性、総菜屋『風見』^{かざみ}のおばちゃんは笑顔で返事をし、慣れた手つきで目の前にある大皿からコロッケを取り、僅か数秒足らずで少女に注文の品を手渡した。

「はい、十個で五百円ね」

「はい」

少女は嬉しそうな顔で代金を払い、嬉しそうな足取りで店から出る。

早速手に持った袋からコロッケを一つ取り出しかじった。

カリカリと香ばしいころもに、中から溢れる芳醇なじやがいもとひき肉のうまみに思わず頬に手を当ててしまう。冗談ではなくほったが落ちそうになったと少女には感じられた。

早々に一個目を食べ終わると二個目を取り出し、口に運ぶ。が、その手が途中で止まる。

少女の目は、前方にある地図看板、そこにある『関東区総合霊園』という場所に目が止まっていた。

そしてその顔が、少し悲しさを帯びたものになった。

「先に、行っておかないとね……」

そう言って地図で道順を確認し、少女は霊園へと向かって歩いていく。

その足取りはどこか重く、どこか、儚げだった。

第二話 自由こそが生き様な人たち（後書き）

どうも！

まだ始めたばかりなので早めに投稿しようとしてたんですが、少し時間がかかってしまいました。申し訳ない。

次回はもうちょっと早めに最新話出したいと思います。

質問、感想など随時待っていますのでお気軽にどうぞ。

それでは、また次回。

第三話 四十パーセントの激闘

関東区総合霊園。

街の中心部から少し離れた場所に位置するそこは、丘のように少し高い土地にある。

住居区画から離れているため緑も多く、その高い場所に位置する土地柄のため穏やかな風が吹くそこは、命を終えた者たちを今日も優しく眠りに付かせている。

霊園の入り口には、一つの巨大な石碑があった。

縦が二メートル、横は十五メートルを超えるその石碑は、奥のほうにある各家の墓石よりも少し真新しい感じがする。

石碑には『再世暦さいせいれき九八七年 関東機関大神災慰霊碑だいしんさい』と大きく刻まれていた。さらにその文の隣には、優に千は越えるほどの人名が刻まれている。

そしてその石碑の前に、少女は立っていた。目を瞑って両手を合わせ、ただ無心で拝んでいた。その透き通るほどの銀髪の短い髪が揺れ、彼女の甘い香りが、風の中へ溶けていった。

やがて目を開けると、脇に置いてあった水桶とコロツケの入った袋を持ち、奥の墓標が立ち並ぶ区画へと入っていく。中は非常に広いので、時折通路にある案内板を見ながら、少女は目的の場所まで歩いていく。

そして角を曲がり、目的の墓標が見えたところで、一人のある人物を見つけた。

日系特有の黒髪を後ろで二つに束ねた少女がいた。その左眼には髪の色と同じように黒い眼帯が付けれられ、しゃがみながら一つの墓標を拝んでいる。それはちょうど、少女が目的としていた墓標だった。

丁度眼帯がついていて死角である左側に少女がいるためか、またはよほど真剣に拝んでいるのか、眼帯少女は少女の方には気付かな

い。

一方少女の方は、少し驚いたように一歩近づき、恐る恐る眼帯少女に声をかける。

「もしかして、真白^{ましろ}？」

その声に、真白と呼ばれた眼帯少女は拝むのをやめ、少女の方に顔を向ける。こちらにも驚いた顔になり、ゆっくりと立ち上がる。

「ルナ・・・？・・・ルナだあ！」

すると真白は少女、ルナの下へと走って行き、思い切り抱きついた。

「ルナだルナだルナだあ！ やっと会えた！ 十三年ぶりだね！」

まくし立てるように言葉を続ける真白に、ルナは困ったような笑みを浮かべる。

「そうだね、十三年ぶりだね。分かったから少し離れて」

さつきから顔をグリグリと胸に擦り付けられ、さすがに同性であっても恥ずかしいため引き離す。真白は満足したりしないような顔をしていたが、やがて興奮が収まったのかおとなしくなった。

「本当、やっと会えた。もう会えないのかと思ってたけど・・・」

「私も。こんなところで会うとは思ってなかったからびっくりしちゃった。元気だった？」

「元気だよ元気！ あれから友達もいっぱい出来て、今じゃもういろんな話したりするんだ！」

「へえ、どんなの？」

「んーっとね、女性週刊誌に載ってるセックス体験談ってあれ本当なのか—————」

「他にはどんな話するの？」

「他にはねえ、電子系の強い子にエロゲーのモザイクの除去方法とか—————」

「それにしても大きくなったね」

これ以上は聞いてはいけない気がしたため、ルナは早々に話を切り上げた。いったい十三年間の間にこの子に何があったのか、少し

不安になった。

「うん！ ルナは全然変わんないね！」

「私はね。いま、いくつになったんだっけ？」

「今年で十八！」

「そっか。じゃあ私の歳、追いついたんだ」

そう言っ、ルナは視線を真白の後ろ、最初の目的であつた墓標に向けた。その視線に気付、真白も道を譲るように少し下がる。

「参っていつてよ」

「うん・・・」

ルナは水桶の水を柄杓ひしゃくですくつて墓石にかけ、墓前に持っていたコロッケの袋を供えて眼を閉じ、手を合わせる。真白もさっき水をかけていたのか、ルナがかけた分で墓の周りが少し水浸しになった。

「彼は元気？」

やがて眼を開けると、ルナは真白にそう訊いた。

「うん、元気だよ。今も学校で授業受けてるんじゃないのかな？」

「えっ？ あなたはなんでここに？」

「今日たまたま寝坊しちゃつて。っで、どうせ学校遅れるなら、久しぶりに顔出してあげようかな、って思つてさ」

真白はばつが悪そうに笑みを作っている。そっか、と言つて、ルナは立ち上がった。

「おい真白。こんなところで何やってる」

不意に聞こえてきた声に、二人はそちらを向いた。

そこに立つていたのは、水桶を携えた壮年の男だった。

歳は四十代後半から五十代前半ほどだが、その髪はほとんどが白髪になり、そこに黒髪がおまけのように混じっているだけで、それをオールバック気味にまとめている。着ている服が立派な作りの紋付袴つきはかまであるところを見るに高い身分にいるものなのだろうが、どこか着崩しているようなその風貌がどこか高貴さを感じさせない。逆にとつつきやすそうな軽い感じがした。

「裁牙のおっちゃん！」

自分と呼んだ真白を男、裁牙は呆れたような顔で見る。

「お前な、俺のことは理事長って呼べて言ってるだろ」

「今学校じゃないんだからいいじゃん。固いこと言いつこ無し！」

「そうか。じゃあなんで本来学校があって俺を理事長と呼ばなけりやならない時間帯にお前はこんなところにいるんだ？ 納得のいく説明してみろ」

「それは・・・その・・・」

言いよんだ真白は裁牙から目を背け、どこか遠いところを見ている。

この男、裁牙は真白の通う学園の理事長である。そして何を隠そうこう見えて、この関東の管理者でもある男だ。

その裁牙が、真白の後ろにいるルナに気付いた。

「お前さんは・・・！」

「・・・ご無沙汰しています」

眼を見開いた裁牙に、ルナは深く頭を下げて挨拶をした。

「こいつは驚いた。十二年前、いや十三年前か。こいつらが世話になったな」

「いえ、こちらこそ」

「ええ、と——」

「ルナ。ルナだよ」

「ああ、そうだった。すまねえすまねえ。なんせあの時一度つきりだったし、お前さん自分じゃ名乗らずに行っちゃうからよ。ろくな礼も出来ずに、すまなかったな」

「いえ、そんな。こちらこそ、あの時はろくに挨拶もせずすみませんでした」

ルナはもう一度深々と頭を下げた。そういえば、と思い出したように裁牙は真白のほうに向き、

「話は変わるが、真白。お前本当になんでこんな時間にここにいる」

「あー！ そういえばルナ、お兄ちゃんに会いたいよね？ 会いたいよね！？ 裁牙のおっちゃん、お兄ちゃんどこにいるか知らない

？」

「どこって、学園に決まってるだろ。さっき出てくる前にキヨちゃんから直々に体育を戦育の授業にしたいって申請があったから、多分街の外の学園領区画じゃねえか？」

「あー・・・喜世子センセまた振られたんだ。あの人大抵振られたとき意外はそんなんないからな・・・」

「でだ真白、お前は何で————」

「さあ、行こうルナ！ レッツゴー、マイ・ブラザーのところへ！」

真白はルナの手を強引に掴むと、そのまま走って行ってしまった。霊園を出て行く二人の少女の背中を見ながら、ボリボリと頭をかきながら言う。

「ったく。どうせ寝坊でもしたんだろ、あのじゃじゃ馬娘め」

やがてその姿が見えなくなると、裁牙は墓標に向き直り、持っていた水桶の水を柄杓でかけてやる。しかしすでに間髪入れずに二人分の水がかけられていたため、墓石を伝って地面に落ちた水は水溜りになり、彼の草履ぞうりと足袋たびを濡らす。

「うあつと！？　なんだよ、ったく・・・」

少しブルーな気持ちになりながら、ズリズリと足を地面に擦り合わせて水気を落とし、裁牙はしゃがみこんで手を合わせた。

真白にも、そして彼女の兄にも言っていないことだが、こうしてこの墓を参るのは彼の十三年前からの日課となっていた。

「姉さん、義兄にいさん。あんた達の子供は本当に手がかかるよ」

そう言って、まるで本人達に向けるように、彼は何も言わない墓石に向かって笑みを作った。

その墓にはこう刻まれていた。

『神風家之墓』と。

森エリアB-5。現在時刻十時五九分。

授業開始から約二時間三十分。リミットの十二時三十分までにはあと一時間ほどあったが、授業はいよいよ大詰めになってきていた。丁度木々が密集しておらず、空が開けた空間に喜世子は訪れた。周りの木もさほど多くないから見晴らしが非常にいい。だが逆にそれは、こちらのことも向こうには見えていることをあらわしていた。「さーって、仕掛けるならここよ。いい加減、隠れてないで出てきなさい！」

喜世子が声を張り上げた瞬間、彼女の左右の茂みから人影が飛び出してきた。いや、飛び出すなどというぬるい表現ではない。茂みを吹き飛ばして二つの影が飛び出してきた。

右から攻めるのは二振りの刀剣の形をした^{デバイス}武装・『フタツトモエ』を構えた羽撃。左から攻めるのは日本刀型の^{デバイス}武装・『ミカギリ』を携えたマキだ。

「なるほど、一斉攻撃はまだしないのね——」

喜世子は周りの気配に気を配りながらデイベイブ・コンダクターを背中から降ろす。

「行きます！」

「ッ——！」

二人の少女の剣戟が喜世子に向かって放たれる。羽撃は体に両腕を回し、そこから放つ二刀による同時攻撃。マキはギリギリまで鞘に刀を収め、自身の射程に入った時点で抜刀を開始する。

喜世子はデイベイブ・コンダクターで羽撃の攻撃を受ける。鋏のように両端から迫る攻撃を真ん中に異物を挟む形で止めたが、羽撃はむしろそれを読んでいたのか、思い切り力をいれ、デイベイブ・コンダクターを完全に止めた。

押し切ることも引くことも出来ない喜世子に、マキが刀を抜き放って、一撃を加えようとする。

「まだよっ！」

完全に抜刀しきる前、喜世子は脚を思い切り伸ばし、あろうこと

か自らマキの射程の中深くに飛び込み、抜かれようとする刀の柄頭つかがしらに思い切り蹴りを入れ、攻撃を発動前に食い止めた。

「ッ!？」

「そんな!？」

マキと羽撃が同時に驚愕する。

喜世子はその動揺の瞬間、力が緩んだ羽撃の武装デバイスを思い切り押し切り、体を捻って向きを変え、マキへと向かって振りかぶる。

マキはとっさに防御しようとしたが、半分ほど抜き放ったときに鋭い蹴りと正面衝突したため、壁にボールを当てるように跳ね返って刀が鞘へと逆戻りしていたため反応が遅れる。

しかしとっさに切り返すことは考えず、とにかく防御に専念するため、マキは鞘を握った左手を前に突き出し、鞘に収めたままの刀でそれを受ける。

「やるじゃない!」

「やりますね。先生も!」

罅迫り合いの状態になった喜世子に向かい、羽撃は後方から攻撃に入る。

すぐにこの状態を解こうとした喜世子だが、それをさせまいとマキがディバイブ・コンダクターを右手でしっかりと掴んでいた。鞘に収めたままだったのがここに来て弊害になった。完全に武器を封じられてしまい、防御が出来ない。

しかし喜世子は慌てない。出来ないならば出来ないなりに出来ることをやるのが彼女の信念であり、今の彼女を作り上げたものだ。

羽撃の刀剣が振り下ろされる。喜世子は片足を上げると刀剣の腹を思い切り蹴って軌道を反らす。どれほどの強さで蹴ったのか、使った手の羽撃が蹴られた方向に若干体勢を崩したが、すぐに逆に持っていたもう一振りが迫る。しかしそれも同じように刀剣の腹を蹴って反らされる。そしてその反動で帰ってきた脚を、円運動を利用して力を込め、向き合っているマキに思い切り叩き込む。

「ぐむっ!？」

蹴りはマキの脇腹に深くめり込む。鉄鋼機構を展開しているはずなのに脇腹に鈍い痛みが走る。鉄鋼機構は基本的に五回は重度の損傷を負う可能性のある攻撃を防げる作りになっている筈なのだが、今の攻撃での損傷度合いを見るに、どうやら今の蹴りはその一回分相当の威力があったらしい。いったい目の前のこの女はどれ程強いのかとマキは呆れてしまう。

そんなことを思っていると、もう一撃を放とうとしてきたため、やむを得ず握っていた鞘を離し距離をとる。蹴りは空振りだったが、金属の棒でも振るったかのような鋭さと重たげな風切り音が、本人が意識せずとも威嚇になっていた。

一旦距離を置かれたが、二人はそれでもかまわず突っ込む。喜世子は今度は冷静に、羽撃の剣閃を受け、マキの高速の居合いを体勢を低くして避けた。

するとマキは左手に持っていた鞘を上には振り上げて殴打しにかかる。それを喜世子は空いていた左腕で難なく掴んだ。

それを見て二人の少女は口元を綻ばせる。それに気付き、何事かと警戒を強くする喜世子。リョーヘイの遠距離からの砲撃かと思っただが、その理由はすぐに分かった。

自分の丁度目の前に見える木が、さっきより近くに見える。いや、今も近づいてきている。

よく見ると木の根元が土煙を上げながらどんどんこちらに近づいてくる。逃げようとするが、両端から武器を、腕を取られてしまう。今この状態では逃げる事が出来ない。

「ハアッ!!!」

次の瞬間、掛け声と共に充分な距離まで近づいてきていた木の根元が土を巻き上げて跳ね上がる。それが木の根元を蹴り上げたことにより起こったことだと喜世子が気付いたのは、打ち上げられた木の根元部分が身体に直撃し、吹き飛んだときだった。

「げへっ!!!」

直撃した腹部を押さえながらも何とか受身を取り、体勢を立て直

す。自分を吹き飛ばした木の陰にいたのは、小柄な身体をした金髪の少女、アンナ・リーベンスだった。

「アンナか……。まさかそんな形の奇襲とは思ってなかったわ。先生ビックリ」

「どうもですわ、先生」

アンナは一礼すると、すぐに意識を戦いに切り替え構えを取る。その手にはすでに籠手型武装『ゼン』が装着されている。

この少女、元EC連合の貴族だった祖父母を持つため、この典型的なお嬢様言葉が普通なのだ。

三人の生徒に囲まれながら、喜世子は鉄鋼機構の損傷度合いを見る。急所に分類される腹部にもらったため、損傷度合いは二十パーセント。残り四発分となっている。

それを見て、喜世子の目が少し細くなった。

「ちよーっちやバイかな。先生もう少し本気出しちゃってもいいかな？ あと十五パーくらい」

「あら、それでいったい何パーセントになるのですの？」

「四十パーセント」

その半分にも満たない数字を聞いても、別段生徒達は憤慨しなかった。加算された分を引いても二十五パーセントと本来の四分の一程度だったことを、むしろ妥当な線だと皆一様に納得する。

皆それぞれ自分の強さや能力に少なからず自信やプライドを持っている。だが、はつきり言って今の自分達の強さは喜世子に本気を出させるレベルのものでないことを熟知している。しかも言うならば、その強すぎる担任教師に初めて途中で強さの割り増しを使用させられたことを、生徒達は逆に誇らしく思っていた。

「では、わたくしたちもそれに答えられるよう、力を出し尽くしましょう！」

「そうだね。うん」

「……そう……だね……」

「あれ？」

今何かおかしなテンションの人物がいた気がする。

「い、行きますわよ!」

「行くよ。うん」

「…い…くぞ…」

「ちよつと羽撃さん! 何であなたそんなにテンション低いんですの!？」

アンナは隣でテンションが壊滅的に激減している羽撃に声を荒げる。

さっきまで威勢良く喜世子に向かっていた姿は今は見る影もなく、本当に同一人物かと思うほど元気がない。

「さっきまでの勢いはどうしたんですの!」

「…だって…」

「だって?」

「お腹すいたんだもん…」

「あなた攻撃に入る前にお弁当三つも食べてたでしょ! なんでもうお腹すくんのですの!」

「だって…今日は急いでたから有り合わせのおかずしか入れてなかったし…戦育用のスタミナの付くもの入れてなかったのよ…」

「幕の内弁当にのり弁、山菜弁当まで食べてましたわよねあなた!

しかも体育会系男子が愛用してるような底が深い弁当箱で!」

「それにしたってどうしてこんなに早くお腹が…」

「合流する前に…森羅から逃げるときにたくさん力使っちゃって…」

「あのクサレ変態!」

森羅のこともそうだが、アンナはこの暴食巫女の燃費の悪さに頭が痛くなるのを感じた。成績優秀、品行方正、性格もいいが、この異常な食欲と休み時間の早弁がどうにもいただけない。しかも三時間分の休み時間全てで早弁を平らげたあとの昼休みに五段の重箱弁当を一人で食べ切るのだから、本当に胃袋が異次元にでも繋がってるんじゃないかと思う。

数人を除いてこのクラスの面子は小学校時代からの付き合いで、アンナと羽撃もそのころからの付き合いだが、誕生会などのお呼ばれがあると、必ず次回から親が『たくさん食べていってね』という台詞を言わなくなったのは今でも憶えている。それだけ食べていながら出るところは出過ぎていて、引っ込むところは引っ込んでいるスタイルを維持しているのは同じ女性として本当に不思議でならない。

「他にお弁当ないんですの？」

「無理…あれお昼用……」

「もう！　こんな大事なときに！」

「あー、もうとりあえず行くね」

そのやりとりに業を煮やしたのか、次の瞬間、一瞬で数十メートルの距離を詰めた喜世子の武装が衰弱している羽撃に向かって振られる。

速い、と思う暇も無い。アンナは防御に入ろうとするが間に合わない。当の本人の羽撃も武装が半分ほど振るわれて今やっと気付いたという風だった。

逆袈裟気味に脇腹を狙った一振り。頭を狙わないのは女性であるからという喜世子の優しさだ。一見甘さとも取れる行為だが、彼女達との実力差を鑑みれば当然といってもいい配慮だ。

しかしその一振りは一本の刀によって防がれる。アンナを挟んで二つ隣にいたマキが、いつの間にか羽撃の前に立っていた。刀はまだ鞘に納まったままだ。

「速いわね。相変わらず」

「負けます。棗には」

一撃で手が痺れるほどの打撃に顔色一つ変えず、マキは力任せに押し切って拮抗状態を解除する。そして素早く自分の腰まで刀を引き、居合いの構えを取った。

喜世子はマキの手を止めようとしてアンナに反撃を受けるのを避けるため、一旦地面を蹴って後ろに引く。

「『三疊断！』」
さんじょうだち

マキは一息に刀を抜き放ち、何もない空間に振るう。しかしその太刀筋の直線状にいた喜世子を斬撃が襲った。武装デバイスを防御に回していなかったら恐らく防御エネルギー大幅に削られていただろう。なにせ迷うことなく真っ直ぐ首を狙ってきたのだから。

三疊断。その名が示すとおり遠くにある物体を切る技である。それはマキの持つ達人級の剣術と、彼女の唯技スキルによって始めて使用が可能となる。

斬撃の着弾を確認し、刀を鞘に納めたマキは追撃に出る。

踏み出した彼女の足裏に、突如として術式発動用の陣が展開される。そして術者の発動の意思を受け、陣はマキを高速で発射した。

射程圏内に入ったところで、マキは武装デバイス・ミカギリを抜き放つ。

喜世子はそれを受け、鞘と刀で両手が塞がってがら空きなマキの腹部に向け蹴りを放つ。

するとマキの前方に先ほどよりも巨大な陣が現れ、彼女を元来た方向に跳ね返した。

マキの唯技スキル、『受け容れざる者』リフレイションは引き離す力、斥力せきりょくを制御することが出来る力であり、先ほどの三疊断もその力を使い、斬撃を刀から引き離すことで発動する。このようなとっさの回避行動などにも使うことが出来る便利な力だ。

引き下がったマキを、今度は逆に喜世子が追う形になる。マキは牽制のために三疊断を放つが、喜世子は難なくそれらを受け流す。

そこで、マキと入れ替わる形でアンナが前へと出る。喜世子は丁度最後の斬撃を払ったところで僅かに隙が出来ている。このタイミングの取り方のうまさは感心するしかない。

アンナは喜世子に向かい手を突き出す。掌底しては遅いそれをとっさに武装デバイスで払おうとしたところで、喜世子はしまった、と思う。

アンナは自分に向けて振られた喜世子の腕とまったく同じ動きをしながら彼女の懐へともぐりこみ、その手を取ると一気に捻り上げる。

瞬間、自分より十センチ以上身長差のある喜世子の身体を真上に持ち上げてしまっていた。

アンナは幼少期より柔術を主体とした格闘技を身体に叩き込まれており、それらを用いて戦闘デバイスを行う。武装が籠手なのもそのためだ。さらにその怪力による強力な打撃技を持ち、『柔よく剛を制す』ではなく『柔と剛にて制す』というのが彼女の姿勢スタンスなのだ。

喜世子は空中に逆さまに持ち上げられたまま思考をめぐらせる。

ここから恐らく地面に落とされることは容易に想像できる。そこか
らどうするかを空中にいる僅かな時間で懸命に考える。

だが、その考えは自分の背中に突如走った衝撃で全て無駄になる。アンナは衝撃と同時に手を離し、喜世子はそのまま衝撃に流されて吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。それでも途中から強引に受身に持っていたのはさすがの一言に尽きる。

すぐに体勢を立て直すと、そこにはアンナとマキが同時に迫ってきていた。マキの剣戟を、アンナの手を払いながら、喜世子はある場所を凝視する。頭の中に叩き込んだである地形が正しいならば、そこは少し高く盛り上がった形になっているはずだ。

「リョーヘイね……くっそ、すっかり忘れてたわ……」

ここにはいない、遠距離から自分を打ち抜いたリョーヘイの技量に感心しながらも、内心は少し悔しく思う。どこかで砲撃してくるとは思っていたが、まさか照準と威力の調整がずればアンナをも巻き込んでしまう可能性のあるあんな状態からとはさすがに予想していなかった。よほどのチームワークと信頼がなければこんなことは出来ない。

今日は本当に嬉しい事だらけだと、喜世子は薄っすらと口元に笑みを作る。

するとその隙を突いて、アンナが喜世子の左手首を掴んだ。そのまま捻りを加えて投げようとする瞬間、喜世子は加えられたものは真逆の方向に力をいれ、その動きを逆に封じる。

「くっ！」

アンナはすぐに別の手を加えようと手を離す。が、手を離して引こうとした途端、喜世子が今度は逆に捻りを加え、掴んでいるアンナを投げ飛ばそうとしてきた。

柔術は基本的に掴んで技をかけるものだが、それが達人級になると条件さえあっていればその逆に、掴んでいる相手に技をかけることが可能になる。

それが分かっているからこそ、アンナはとっさに握り返し、さっき喜世子がしたように逆方向に力を加えて動きを相殺する。それによって、離そうにも離せない完全に拮抗した状態に追い込まれてしまった。

傍から見ればただ手を掴んで動かないように見えるが、どちらかが動きを見せればすぐに投げられる、非常に高度な技の応酬が繰り広げられているのだ。

しかも喜世子はそれを行いながら逆の手でマキの相手をし、さらにそのままアンナをリョーヘイの射線に入れて盾代わりにしている。さらに言うならば、喜世子はこの技を今初めて使ったのだ。たった今受けたばかりの技の仕組みを一瞬で理解し、その対抗策をすぐにものにしてみせるのだから本当に強さの底が知れない。

しかしアンナも柔術だけなら喜世子以上の実力を持っている。マキへの対応で一瞬だけ出来た意識の隙を突き、その瞬間に手を離して体勢を立て直す。ここで深追いして技をかけることは得策ではないと分かっているからだ。その代わり、懐^{ふところ}からあるものを取り出し、後ろを向いて羽撃に何かを投げた。

「羽撃さんっ！」

「え……？」

投げられたものは三つの飴玉と、細長いクッキーを柔らかくしたような携帯食料『熱量メイト』が一本。甘党のアンナが持っていた食料の全てだった。

それを見て、羽撃の眼に復活の灯火^{ともしび}が宿る。

投げる前に全て封を切ってあったそれを、羽撃は素早く前進し、

方向がそれぞれバラバラに投げられていたそれらを、あろうことか口だけで全てキャッチしてしまう。

ゴリゴリと飴玉を噛み潰し、水がなければ食べられない熱量メイトを難なく飲み込み、プハー、と一息。

それで、彼女の眼に再び闘志の火が戻る。

「行くわよー！ー！ー！！」

完全復活を果たし、羽撃は一息で喜世子の眼前まで肉薄した。

「やりましたわ！」

「三対・・・いえ、四対一ね」

武闘派女子三人の猛攻に、さすがの喜世子も押され始める。きちんと腰を据えて戦い合えるのならまだしも、遠距離からの狙撃に常に気を配っておかなくてはならないこの状況ではさすがに難しい。といっても、生徒達からすればまだまだ彼女は脅威であることに変わりはないのだが。

そうこうしている内にどんどんと押され始め、喜世子はたまたま体勢を立て直すために大きく距離をとる。それをさせまいと、三人はさらにそれを追い続ける。

「ちよっちヤバイかなあー・・・」

これではジリ貧だと判断した喜世子は一旦引くしかない、生徒達に背を向けて駆け出した。

「しかし、一時はどうなることかと思ったけど、これで何とかなったな」

森エリアA-3で、リョーヘイは武装・『メントモリ』を肩に担いで安堵の息を漏らす。

一時は羽撃が脱落するのではと内心ヒヤヒヤさせられたが、何とか持ち直し、今はエル君が脱落する前に残した作戦通りに事が運んでいる。

「さあって、こっからは俺たちも前線に出るからな。頼むぜ、ルーちゃん」

リョーヘイは後ろを振り向いたが、そこにあったのは頭を抱えて岩陰に隠れている少女の尻だった。

「ルーちゃん：怖いのは分かるけど、もう腹括ろうぜ」
サキユバス

そう言って後ろで震えている若干男性恐怖症の女淫魔、ルーリイ
||ネリオットに声をかける。

「で、でもでもでもおっ…」

情けない声を上げながら、ルーリイは顔を上げて岩陰から顔を出す。脚の位置を変えるときにバルンッ！とその巨大な胸が大きく揺れる。Gはあるらしい。

ふわりとした緑のロングヘアで、淫魔族特有の端整で美しい顔立ち、まだ成人していないため可愛らしい部類に入る造形をしている。

リョーヘイはハア、と思い息を吐く。

「大丈夫だって。別に喜世子先生とガチでやり合えって訳じゃないんだから。そんなこと言うなら俺だって後方支援が主体だから前線出んの怖えんだぜ」

なんとか説得を試みるが、ルーリイはどうにも決心がつかないらしく『うーん…』などの煮え切らない返事を返してくる。

そうこうしている内にリョーヘイの使^{シグ}俱、白蛇型の『シラバミ』が音声を発し、作戦開始が近いことを告げる。

「ルーちゃん、頼む！俺たちにこれが成功するかどうかがかかってるんだ！」

手を顔の前に合わせて頭を下げてくるリョーヘイを見て、ルーリイはしばらく考え、やがて、恐る恐る首を縦に振る。

「分かった……」

「おっしや！」

ガッツポーズをしたあと、リョーヘイは急いでメメントモリを構え、スコープを展開してそれを覗き見る。

そこには、三人の追撃から必死に逃げる喜世子の姿が映っていた。

現在喜世子たちは森エリアB-6にて戦闘を行っていた。

正直、喜世子はすぐに距離が開いて体勢を立て直せるだろうとふんでいたのだが、思いのほか彼女達が追いつきそれをさせてくれないため、

(これって…ヤバイ…：？)

と、少し焦りが見え始めてきていた。

そこへアンナの当て身が飛んできたため、慌てて避け、意識を戦闘に切り替えた。

このまま逃げ回っていても埒が明かないと、喜世子は思考をめぐらせる。このままあと一時間ちよつと逃げ切れれば時間切れで彼女の勝ちになるのだが、それは全力で向かってくる生徒達に対して最低の侮辱だと端から考えていない。

そのため、次にある空間が開けたポイントで勝負を決めると決心した。

それはもうあと数十メートルの所まで迫ってきている。

(決めるっきゃないか)

そのとき、アンナの声が森に響いた。

「羽撃さんっ!」

「まかせて!」

「ッ!？」

見ると、羽撃はフタツトモエの柄同士を合わせ一つにする。それは一本の弓となる。エネルギー体で出来た弦を引き絞り、煌々と光る光の矢を生み出すと、一気に発射した。

喜世子はディバイブ・コンダクターで防御したが威力が強く、そのまま後ろに弾かれてしまう。体勢は崩さなかったものの、吹き飛ばされている間もマキとアンナが追いついてくるため気が気では

ない。

羽撃はさらに弦を引き、複数の矢を生成して一息に放つ。それを弾き落としながら後退を続けると、目的地の開けたポイントに到着した。

ここで決着をつけようと構えようとした瞬間、突如として周りの地面から複数の筒状の装置が円を組む形で飛び出してきた。

これこそが、脱落前にエル君が棗に設置させていた最終兵器だった。

それらは起動するとドーム状の結界を作り、彼女達四人を閉じ込めてしまった。そして後退していた喜世子の背中が結界にぶつかってしまう。

まだ少し距離を取る気でいた喜世子にとっては迷惑この上ない完全な予想外だった。結界は思ったよりも狭く、四人で闘うには窮屈すぎるため、喜世子はすぐに結界を破壊しようと、結界の壁に向き直って武装デバイスを振るう。

そんな彼女の眼に飛び込んできたのは、さっきまで逆方向にいたはずのリョーヘイのメメントモリの砲弾だった。

白い光線が真っ直ぐ喜世子を狙って飛んでくる。喜世子はいつの間にも逆方向に移動したのかということよりも、このまま結界を破ればそのまま返し手が出せない自分に直撃すると察知し、すぐに防御体勢を取る。

直後に、結界に砲弾は直撃した。

初めからあまり丈夫なものではなかったのか、結界はその一撃で崩壊する。しかしその時に生じた爆発で、喜世子は地面に叩きつけられた。

今度のは完全に予想外だったため、受身を取る暇も無い。ごろごろと地面を転がり、しばらくしてようやく止まる。

粉塵が立ち込める中、痛む身体を押さえて立ち上がる。

瞬間、背後から彼女の肩口に巨大な光刃が突きつけられた。巨大な砲身の下部から出現しているそれは、間違いなく近接戦時に展開

されるリョーヘイのメメントモリのものである。

反撃しようとするが、前方からマキに首元に刀の切っ先が突きつけられ、さらにアンナに右手首を掴まれて捻られ、固められてしまう。

さらに粉塵が晴れた前方には、羽撃がフタツトモエに矢を番えてこちらを狙っていた。

完全に包囲され、誰がどう見てもチェックメイトに追い込まれていた。

「あらー……ヤバくね？」

「ヤバいんじゃないくて、終わりなんですよ、喜世子先生」

後ろから聞こえてきたリョーヘイの声に、喜世子は顔を向けることが出来ないため『そつか……』とだけ言っておく。

「で、ルーリーの『ジャンプウォーカー阻まれない歩み』であたしをここまで追い詰めたわけだ。すごいじゃない。ルーリー、あんたもね」

さつきから感じていたもう一つの気配、ルーリーに向かい、喜世子は^{ねぎら}労いの言葉をかけてあげた。

リョーヘイの後ろに隠れていたルーリーは一瞬ビクリと飛び上がり、おずおずと顔を出す。

今までリョーヘイが一瞬で色々な場所から攻撃を行ってきたのは、クラスで補助系最強の異名を持つ彼女の^{スキル}唯技の一つ、^{テレポート}空間跳躍能力・『ジャンプウォーカー阻まれない歩み』あつてのことだった。

「あ、ありがとうございます……」

ボソボソと、少し照れくさそうにルーリーは礼を言った。

それを聞いて、さて、と喜世子は覚悟を決める。

「さあ、やっちゃいなさい。今回はあんた達は本当によくやったわ。私の負けね」

ハア、と少し悔しそうに息を吐く彼女を見て、生徒達は嬉しそうに笑った。

ドゴーンッ！！

——途端、羽撃の頭上からオレンジ色の炎が降り注ぎ、彼女を吹き飛ばす。完全な不意打ちだったため防御する暇もなく、『きゃ————』という短い悲鳴だけが聞こえ、羽撃は脱落^{リタイア}となった。

他の五人が何が起こったのか分からずポカンとしていると、さっきまで羽撃がいた場所に人影が降り立った。

両手に不可解な文字の描かれた手甲をはめ、黒色の短髪を風になびかせ降り立った人物は、

「「「「森羅!!?」」」」」

「そうだよ、森羅だよ」

人影、神凧森羅はニヘラッと笑い、そう言った。

第三話 四十パーセントの激闘（後書き）

どうも！

ここ最近筆の早い作者です。自分でも驚いています。

やっぱり感想とかもらうと「ああ、頑張らなきゃ」って気持ちが変わってきますね。

ご意見ご感想ありましたらいつでもください。それだけ励みになります。

それでは、また次回。

第四話 過去とコロッケと関節技

真白とルナは手を繋ぎながら、商店街の中を歩いていた。

真白は今年十八歳であることを差し引いても女性の中では長身に入る部類の体格なので、それは一見すると年のそう離れていない姉妹が歩いているようにも見える。しかし見るからにうきうきとした空気を噴出させている真白に比べ、手を引かれているルナは非常に落ち着いた雰囲気であるため、どちらが姉か、と訊かれたら答えに詰まるところだ。

「あれ、真白じゃないかい」

途中、ルナの買ったコロッケを二人で食べていると、前方の曲がり角から出てきた人物が二人を見かけ声をかけてきた。

真白たちの通う学園の制服の上から着物を着流しに羽織り、帯で腰辺りを無造作に結んだだけのだらしない格好の女性だった。

「あっ！ しつつん！」

それに気付き、ぱたぱたと手を振る真白に、しつつんこと獅子緒ししおは、のっぺりとした足取りで彼女の下まで歩いてきた。

「どうしたんだい、こんなところで」

「寝坊っ！」

「威張って言ったこっちゃないだろ、それ」

胸を張って答える真白に、獅子緒は苦笑いを浮かべている。

「そう言うしつつんの方はどうしてこんな時間にここにいの？」

「寝坊？」

「あんたじゃあるまいし。あたしは今羽撃んとこからの帰りだよ。
あにじゃ兄者のお使いで新術式を受け渡しに行ってたのさ」

羽撃の実家である十百千神社は、ここ関東においては二つしか存在しない神社の一つだ。神がいなくなったこの時代では、神社や寺院は神を祀り讃える場所ではなく、術式の研究機関兼術式の販売などを行う場所になっている。

獅子緒の家はあまり裕福では無く、そこへの個人的に開発した術式を『奉納』することで生計を立てている。もっとも、彼女が趣味でやっている市場取引の方が稼ぎはよく、今の財産総額なら三年何もせずに食べていけるだけの蓄えはあるらしい。

「ところで、その子は？」

獅子緒はそこでルナに意識を向けた。さっきからどうしていいかわからないような雰囲気で、ルナは真白の後ろで佇んでいる。

「ルナだよ！」

「いや、ルナだよって言われても……いや、ルナって確か……」

「うん！ あたし達の命の恩人！」

そこまで言われ、獅子緒はハツとしたような顔になる。そして次にまじまじとルナの顔を舐めるように見る。

「命の恩人って……確か十三年前だよ。あたし達より年下じゃないのかい、あんた？」

「へっ！？ あ、はい……」

はつきりと自分に対して声をかけられ、恥ずかしいのかルナは眼を泳がせる。

「年下なんですけど……年下じゃないと言うか、なんと言うかですね……その……」

しどろもどろで要領を得ないことを口走るルナの心情を察したのか、獅子緒はもういいよ、と言ってそこで話を切った。

「あたしの名前は獅子緒。真白とコイツの馬鹿兄貴の友人だよ、よろしく」

「あ、ルナです。ルナリアアルテミル。よろしく」

互いに名乗りあい、獅子緒はルナに手を差し出す。お近づきの印にまず握手は彼女のスタイルだ。ルナは察し出された手に一瞬戸惑うも、その手をしっかりと握った。獅子緒もその手を力強く握り返した。

「さて、挨拶も済んだことだし、学園に行くよ」

「ええー！ 行くの！？」

「え!？ 行くって言ってなかったっけ？」

「そんなん裁牙のおっちゃんから逃げる口実に決まってるじゃん」

「裁牙のおっさんも大変だな……」

獅子緒はやれやれと息を吐く。

馬鹿言っでないで行くぞ、と真白を促し、学園の方に歩いていてしまった。

「あ、待ってよしっつん！」

真白は慌ててルナの手を取って駆けていき、獅子緒と一緒に学園まで歩いていく。

(……どうしよう)

ルナは真白に手を引かれながら、内心ドキドキしていた。

最初はただ久しぶりに街を見つけたため、好物のコロッケを買って墓参りをして帰るつもりだったのが、そこで真白と出会っていきなり学園に連れて行かれることになるなんて思いもしていなかった。

これから行く学園で、十三年ぶりに再会するもう一人の人物。

いったい彼はどんな風に成長したのだろう。素敵な青年になっているのだろうか、それともあの時のまま成長して、今でも誰かを笑顔にしているのだろうか。

ルナは自分の格好を見る。

細身ながらもしっかりとした肉付きの自分の体に纏っているのは、毎日洗濯してはいるがもう何十年と変えていない着古したインナーに上着とスカートだけだった。

それを見て恥ずかしさに赤くなる。

(あの時よりも、格好良くなったのかな)

最後に分かれるときに、彼は言った。

いつか必ず合に行って、その時は絶対に、自分と家族になると。

まだたった五歳の少年が力強い眼で言ったその言葉に、そして最後に見せたやわらかな笑みに、自分がどんな感情を抱いたのかは今でも憶えている。いや、今でもその感情を抱いている。

そう思っ、ルナは自分の顔が熱くなるのを感じた。

そして冷静に考えてみて、当時にその感情を抱いたのであれば、自分はもしかしてとても危険な部類の人種に当てはまるのではと思っってしまう。

（い、いやいやいや！！　そ、そりゃ確かに当時、当時はね！　確かに彼もまだそんな歳ではなかったし、もしかしたら当時、当時は！！　私もそう見られて当然かもしれないけど、あの時の……そう、友人！　大切な友人として抱いていた感情！　だから私はそんなロリだかシヨタだか言う危険な人種では断じてなくて！）

「がああああ！」

不意に聞こえてきた真白の悲鳴に、ルナはハッと我に返る。見るといつの間にか自分は恥ずかしさのあまり握っていた真白の腕に思いつき関節技をかけていた。

「痛っイイ！！　お…折れるうゝ！！」

「それ以上いけない！」

もうあと一步で枯れ枝をへし折ったような快音が聞こえる前に獅子緒が間に入って事なきを得る。

「ご、ごめんね真白！　ちょっと考え事してて……」

「あいたたた……もう、痛いよルナ」

真白は決められた左腕を押さえながら苦笑いを浮かべる。

「本当にゴメンね」

「いや、いいよ。私もコロッケ全部食べちゃったのが悪いんだし」

「……………えっ？」

ルナの声のトーンが二つほど下がった。自分でも出そうとは思っていなかったが出ってしまった。

真白の手を見るとさっきまであと六個は入っていたはずのコロッケの紙袋は折りたたまれて鶴になっている。さらによく見ると自分の手を握っている手は油でギトギトに汚れ、口の周りにはコロッケの衣がびっしりと付いている。すでに目の前の少女はそれだけで女として終わっている感じだった。

「いや、これ風見のコロッケでし、ウチもよく食べるんだけどねってあれルナどうして腕を捻り上げるの――」

言葉が終わる前に、ルナの腕は勝手に動き、勝手に少女の腕を決めていた。

「がああああ！」

オレンジ色の炎が燃え盛る中、森羅はへらへらと笑みを作る。

「何だよ何だよ、先生絶体絶命の大ピンチじゃん。これじゃ俺出てきた意味ねえじゃん。先生倒して終わりじゃん」

「ちょっと」

「ん？」

呼ばれて振り向いた森羅の眼前にあったのは眩い光の矢だった。

一瞬時間が止まったかのような沈黙のあと、それを番えていた羽撃は口パクで死ねと言って満面の笑みで弦を放す。引きつった笑顔になった森羅は、速攻で頭を下げてそれを避けた。

まず見えたのは羽撃が起き上がるところだった。

リョーヘイは緊張した面持ちで森羅を見ていたが、森羅は後ろの羽撃に向き直る。次の瞬間、羽撃が零距离で森羅の頭にヘッドショットをぶっ放して、森羅がそれを避けた。

まあそこまではよかった。別によかった。いつも教室内部で見る

光景だ。

森羅が女子の着替え中に教室に入って撃たれ、昼休みに魔界男子スクウエア四人組がエロゲーのジャンルはどれが至高かを討論していると食事ラオース中にうるさいと羽撃に叩き伏せられ、エル君がクラス的女子をモデルにした同人ゲームを作成していて運悪くベッドシーン作成時に羽撃に見つかり持っていたノートパソコンごとんでもないことにされたこともいつものことだ。

しかし外れた矢がこちらに向かってくるのは完全に予想外だった。「逃げろー！ー！ー！！」

リョーヘイの号令で矢の射線上にいた五人が一斉に飛び退く。流れ弾は四人がいたところに着弾し、盛大に辺りを爆破する。確実に頭部は吹っ飛ばすつもりだったのがよく分かる。

リョーヘイはすぐに起き上がったが、次の瞬間、目の前にとんでもないものが現れた。

喜世子だ。

笑っている、楽しそうに。拳を握っている、めっちゃくちゃ硬くしまった、と思い慌ててメメントモリを振るうが、元々近接格闘用の光刃は緊急時に使用するための予備兵装でエネルギー効率の問題を考慮していない。すでに装填していたライト・カードしんりよくが底をつき、光刃は展開されていなかった。すぐに体内生成の心力で補おうとするが遅く、一発目の拳が顔面に刺さるり、一気に防御エネルギーの二十パーセントを持っていかれる。術式を展開した形跡はない人間の徒手のみでどうしてこれほどの威力なのか毎度毎度不思議に思う。

もはや形振りかまわず、リョーヘイは光刃の生成されていないメメントモリをただの鈍器として振るうが、喜世子相手には速度が足らず、振りぬく前に四発の拳の乱打を喰らいリョーヘイは脱落した。リタイアさらに喜世子はその近くにいたアンナに飛びかかる。アンナはとっさにその腕を取って技をかけに入るが一步遅く、逆に力を利用して風車のように一回転し、伸びきった喜世子の腕に引っ張られて

地面に叩きつけられる。背中を思い切りぶつけたため呼吸が一瞬止まり、その直後に喜世子の腹部への一撃で脱落^{リタイア}。

さらに切りかかってきたマキの剣閃を避け、二、三度剣を交えるがやはり喜世子の実力の方が上であり、大きく振りかぶった一瞬の隙に五本急所を突かれて防御エネルギーがゼロになり、マキも脱落^{リタイア}。そして、そこから少し離れた草むらに隠れていたルーリイにも迫るが、彼女は涙目で両手を挙げて降伏のサインを出す。それで全てが終わった。

僅か十一秒、羽撃の矢が着弾してからの大逆転劇だった。

「つぶねえな羽撃！！ あにすんだよ、なんでそんなご機嫌が四十五度なんだ！？」

「もう一発喰らわすわよこのアホ！！ あんた今何したか分かってないの！！」

「俺の溜まりに溜めたものを羽撃の頭からぶっかけた」

「卑猥な物言いをするなあ！！」

顔を真っ赤にしながら『卑猥な』の部分で矢を生成、『物言いをする』で番え、『るなあ！！』で発射。この間僅か一秒弱。あまりの早業に森羅は避ける間もなく顔面に矢を喰らい吹き飛んだ。

しかし若干芯がずれていたため、矢は着弾と同時にそれで別の場所を爆破する。

「チィッ！ 次は確実に仕留める！！」

「ちよい待ちちよい待ち！ お前今女の顔してねえよ！」

防御エネルギーを八割失いながらも平然と起き上がる森羅を見て、鬼の形相の羽撃は一瞬条約で禁止されている『対人に対しての戦力上限』のリミッターを本気で外しかける。

「はい、そこまでよ羽撃」

しかしそれは制止させられた。あと一步で世界の害虫を駆除でき

そうなときに横槍を入れられ、半ば女性がするようではない据わった目つきで羽撃は声のほうを見る。

そこにいた喜世子はやれやれといった感じに頭をかき、

「悔しいのは分かるけど、あんた、自分の鉄鋼機構スチール・フレームのエネルギー見てみなさい」

そう言われて羽撃は電子画面を展開する。そこには残量ゼロという表記だけがなされていた。

「あんたはさっきので失格、今授業中だからあんたは森羅に攻撃することは出来ない。分かるわよね」

羽撃は何か言おうとしたがすぐに口をつぐみ、しばらく悔しそうにしていたがやがて息をつく。

「解りました、先生の言うとおりにします」

「ん、よろしい」

羽撃は疲れたように手を下げる。弦を引いていた右手だけを。

「うわおう!!」

ビュンッ!! と風切り音を立てて矢が森羅の頭上を掠めていった。

「おめえ今攻撃しないって言ったべ!」

「いやいや、今のは手を順番に下ろそうとしたらなった事故よ事故」

「何で順番に下げんの!? 怖いわ、ちびりそうに……いや、なんでもない」

「ちびったの!?!」

「ば…、違えよ! んなわけねえだろ、ちょっと汗が股間に集中しただけだよ! 断じてちびってねえからな!」

「だって今……」

「ちびってねえって! 証拠————」

「証拠見せてやるって言ってズボン下ろしたら男として再起不能にするわよ」

喜世子に釘を刺され、森羅は渋々腰元にかけていた手を下ろした。舌打ち付きで。

「あんたねえ……」

「だってせっかく合法的に下半身露出できるチャンスだったんだぜ」
「ちびってないことを確認させるために下半身をさらけていいなんて法律はこの世界のどこにもない！」

喜世子は本気で何かにつけて脱ぎ出すこの馬鹿のタマを潰してやるうかと思ってしまう。水泳の授業でも気付くと海パンを脱いでいるし、保健体育の授業を担当した後輩の日野は泣きながらもこのクラスを担当したくないと言うほどのことをしでかしたこともある。もちろん後で同じ女性としてクラスの女子勢から制裁を受け、男子勢からは『童顔眼鏡っ子教師という重要枠を泣かした』という意味不明な理由でのリンチを受けた。もちろん自分もやっておいた。男子勢の中で『どんな気分だった』という尋問をしていた奴も危険思想を正すためにやっておいた。

「なあなあ、先生」

そんな馬鹿の馬鹿な行動の一部始終を思い出していると、馬鹿が口を開いた。

「これって結局どうなんの？ 俺の勝ち？ それとも先生との一騎打ち？」

森羅の視線は喜世子の後ろの倒れた三人と涙目のルーリイを見て言っている。確かにさっき喜世子は負けを認めたが、実際には止めを刺される前だったため今こうしている。これはルールのどのようなんだろうと思ったが、さっき止めを刺せと言いはしたが降伏はしていないことを思い出す。

「そうね、続投よ。あたしとの一騎打ちね」

「ええー、マジかよ！」

森羅は露骨に嫌そうな顔をした。

喜世子の降伏がどう取られるかは置いておくことにして、この場合、実際生徒側の最後の一人の状況を作り出したのはその生徒側の森羅の撃破によるものではなく喜世子が作り出したことにある。

生徒同士が潰しあって最後の一人になる、喜世子が生徒全員を倒

すという条件の場合、どちらの場合においても必ず生徒側の誰か一人と喜世子が残るように出来ている。その時戦闘続行か否かを決めるのに重要になるのはその状態をどちらが作ったかになる。

簡単に言ってしまうえば喜世子に自分と誰か一人以外を倒させて、自分が残った一人を倒せばその場合生徒側の勝利、一方その逆に自分と誰か一人以外全員倒して決着をつけようとしても、喜世子がどちらかを倒せばその時点で生徒同士の潰し合うという条件は消えてしまうという、やり方しだいではなんとも漁夫の利が目立つ勝利条件なのだ。

そしてこの場合適用されるのは後者である。

「マジだりいよ。俺せっかく嫌われ者演じてまでこの授業終わらせようとしたのにさ」

馬鹿は口を尖らしてブチブチ文句を垂れてくる。

「大丈夫、みんなそんなにアンタの事好きじゃない」

「人間不信になってやるう!!」

涙目になって走っていこうとする馬鹿にイラッとして、喜世子は空に向かって二、三度発砲して黙らせた。

「あー、もうさっさと始めるわよ。授業時間も後一時間ちよいしかないんだから」

「それなんだけどさ、喜世子センス」

「なによ」

始めるといったのにまだごねるように会話を続けてくる森羅に、喜世子はイライラと返答する。しかし次の瞬間、森羅の口から出た言葉に耳を疑った。

「手加減はすっからさ、とりあえず出せるところまで解放していい？」
その言葉に、喜世子に羽撃、草むらに隠れたままのルーリィ、さらに意識を取り戻していたリョーヘイ、マキ、アンナもその言葉の意味を理解し目を丸くした。

あの森羅が面倒くさい戦育の授業で本気を出すと言ったのだ。

「どうゆう風の吹き回し？ あんたが本気出したいなんて」

「馬っ鹿だなあ、本気じゃねえって。大体俺が自分の意志で力出せねえの知ってんべ？　ただ、いけるとこまででいいから本気出したってただだよ」

じゃあもう本気でいいじゃねえか！　と面倒くさそうな顔で全員にツツコミを喰らう。

そっか、と森羅は頭をかいて、

「さっき羽撃が撃った矢が頭掠ったじゃん、あんときに思い出したんだよ。ニュースでやってる朝の占術せんじゅつコーナーでさ、『全力で物事に当たればいいことがあるでしょう』って」

森羅はニカツと笑顔になって、

「それってすっげえ最高じゃね？　ちよっとメンどいの我慢すればいいことがあんだぜ！　ちよいリスク、ハイリターンじゃん！」

笑顔を向けられた喜世子は、この馬鹿の純粹さとポジティブさと馬鹿さとアホさに今一度呆れてしまう。

まさか本気を出す理由が朝のニュース番組の占術の結果だとは。

しかし、喜世子はニカツと同じくらいの笑顔を向け、

「面白そうね、一回全力のアンタとやってみたかったのよ」

「おいおい、買い被りすぎんなよ。いくら俺が全力でも先生とじゃまだまだ戦力差ありすぎんぜ」

「大丈夫よ、生徒相手に本気出すなんて大人気ないことしないわ。でも、せめて六十パーセントまでは出させてよね。あんたも威力の方は鉄鋼機構スチール・フレームが耐えられるまでなら好きだけ出していいから」

「んー……ま、それくらいならいいか」

アイツ特に考えてないな、と喜世子は思いながらも、今まで授業でおちやらけているだけだった森羅が本気を出してくれることにどんな理由でも嬉しかったりもした。

「それにしても『好きなだけ出していいから』か……なんて青少年にとって甘美な言葉吐いてんだよ先生。大丈夫、そんなこと言わなくても先生のこととはちゃんと意識してっから俺」

「ハハハッ、何を言ってるのかなこの脳内ピンク野郎は」

喜世子はデイベイブ・コンダクターを構え、森羅は両腕のコウテンを胸の前でカチカチと鳴らした。

「見せてもらうわよ。プロト・マギカ“原初魔術”の力を」

「おうよ！ この“パラダイスフレア火炎騒動”こと、かなぎ神凧森羅の力、見せてやるぜ」

第四話 過去とコロッケと関節技（後書き）

どうも！

戦育授業は次話辺りでラストです。次からは世界の解説を入れていくと共に物語が大きく動き出します。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3643x/>

機械魔術の禊人

2011年11月17日03時10分発行